

*たとへば、越後北蒲原の紫雲寺といふ村名（豊後の眞野長者の建立した寺が紫雲寺）に幸ふじて記憶をとどめてゐる眞野長者も、他の長者と同じやうに山林を拓き河川を修めたと傳へられ、その企てた灌漑工事によつて古い繪圖にも長者堀の名を残してゐるが、その居住址から丹朱の甕や彌生式土器とともに、鐵滓が發掘された（大木金平氏『郷土史概論』）。

一一一

鐸の祭祀——職業團體の手に移る前の日本の鐵の文化に初めて眼をつけ、この國の傳統の根源的構造をこゝから説明しようとしてゐるのは、前述の福士幸次郎氏である。鐵の文化に對する同氏の摸索と追究は二十數年にわたるといはれ、そのための實地踏査に足跡をほとんど全國の到るところに印してゐる。

福士氏は、ニブの外に、サビ、サブ（サム）、シブ、ソブ（ソボ）、ヒシ、ヒソ等の語を含む地名が鐵の所産に關係あること、カル、コシ（今）、アリ等が金屬一般よりもむしろやはり鐵との所縁を有することを明らかにして探究の手がかりとしての福士公式を樹立したのを初めとして、古代史研究や傳承學のうへにいろいろ重大な示唆を投じ

てゐるが、これらのうち特に重要なのは鐸サナギの祭祀を指摘したことである。

氏の研究はさらに、鐸を通じて賽の神、猿田彦、惠比須神等に結びつき、つひに同氏が鐸所と呼ぶ一つの神域の推定に達し、古代日本の祭祀の幽邃にして森嚴な本質に近づいてゐる。かうして、最古代の太陽文化を考察してその祭祀が日本の古神道に類似するところがあつたにちがひないと想像する私の見解と、こゝに期せずして一致したのである。

サナギ（鐸）とともにサナミがあつて併稱されたことを指摘したのも福士氏である。果して然りとすれば、日本の傳承のうへに最も高く聳えて霞む謎の一つにさへ觸れてくることになるが、それはとにかくとして、サナギ（サヌキ、サナグ、サナゲ）とともにサナミなる地名がかなり多いことはたしかである。『戒壇院公用神名帳』にはまた、佐那見大明神と見えてゐる。しかるに、こゝにおもしろいのは『契丹古傳』を見ると、古頌のうちに「蘊杜乍喃吟、綿杜乍喃蜜」とあり、それがどうしてもヲトサナギ、メトサナミとしか訓みやうがないことである。鐸にもおそろく黒巫と白巫のやう

な區別があつたのであらう。

サナギは、たぶん穀物の實（すなはちサナ、シネ）に象つたもので、無限の生産力——したがつて生命力の衰頹や汚濁を淨める力——を持つものと信じられたらしく、鈴を鳴らして出産を守る風習すら現に各地に遺つてゐる。すなはち、それは、鐵の呪力が穀靈信仰と結びついて發達したものらしく、その起原は明らかに南東アジアに求められる。

* 前掲論稿参照。

サナギ神——サナ、サヌは、サラ、サルに轉訛しやすい。猿田彦はもともと、サナダ彦であつた。紀州那賀郡の一農家に傳はつた異本猿屋傳書『猿廻記』*によると、五十鈴の川上の佐那田に垂跡した猿田彦神は、養老元年に至つて加賀の大野湊に移り、佐那武大明神に祀られたとある。現在はラ行音になり武をタケとよんで佐良嶽大明神（石川郡大野村寺中）になつてゐるが、とにかくこれによると猿田彦はもともとサナミの神であつた。この大神と五十鈴の川上との特殊な結びつきも、これでやうやく明らかである。

ある。

猿田彦がサナダ彦であるとするれば、天鈿女命の賜はつた猿女の名もサナ女でなければならぬ。さう考へて調べてゐるうち、『熱田宮舊記』に果して「鈴御前天鈿女命」とあつた。天鈿女命が猿田彦神を送つて行つた伊勢のサナガ田へは「古事記」によると手力雄命が降臨したことになつてゐるが、この手力雄命を祀る佐那神社（多氣郡佐奈村丹田）に配祀されてゐる若沙那賣命も、かうして猿女の君の一人であることが判明する*。

震旦のシナが穀靈としての神農シナから出てゐるらしいとは前に述べた。新羅も本來はシナ（辰——斯盧）で、これをシラギと訓んだところにもシナギすなはちサナギからの轉化があつたのかもしれない。もつとも、今のところ私は、鈴と穀物とを結びつけた例を日本以外に蒐集してゐないので、確かなことは云へないが、サナもしくはサルといふ語と穀物との關係だけは、西方に於いてもかなり濃厚のやうである。

インドネシアには、王を意味する語としてサルタン、ラジャ、スナ等が知られてゐるが、サルタン (Sultan) もスナ (Suna) も同系統の語で、アッシリアのサルゴンに

通じてゐる。

聖域の湧水を意味するらしいサルゴンすなはち Sar-ganu の名は、アッカドの父神サル (Sar) もしくはサルサル (Sar-sar) と関係あり、したがつてフェニキア人のサルラブ (Saru-rabu) などとも無縁でない。^{***} ヒューキットは、このサル神は雨雲に授胎するといふインドの風神マロチ (Maroti) またはハヌマン (Hanuman) であると主張してゐるが、やはり鼻の高い猿の姿で飛行する民俗神ハヌマンがサル神と同一視される^{***}とすれば、風と縁のある伊勢の猿田彦神を——たとひ偶然の一致とはいへ——誰しもすぐ聯想したいであらう。

* 『郷土研究』第二卷第十一號に於ける逸木清流氏の報告に據る。

** 延喜式の皿杵兵主神のごときも、たぶんサナヤ兵主である。『神祇寶典』(卷七)は、『大倭本紀』の記事を引きつつ、天孫降臨の時の神寶なる齋鏡三面、子鈴一合のうちの「子鈴」が大和の穴師坐兵主神であると、兵主神が一般に鈴とゆかりあることを示唆してゐる。

*** Sayce, *Hibbert Lectures for 1887*, pp. 26 note 1, 27, 196 note 1, 265 note 1.

**** Hewitt, op. cit., p. 161.

***** 「神風の伊勢」と云はれたばかりでなく、この國を占據してゐた伊勢津彦は高崎正秀氏も論じてゐるや

うに(『出雲』第六號)、風の神であつたらしい。

穀靈信仰の傳播——サルも農耕の神であるが、この意味は、サルの原形式とも云ふべき女神シャル (Shar) に於いていつそう明瞭に見られる。といふのは、シャルは、サナからサラを通じて轉化した日本語のサヤ(莢、室)に近い穀物の殻であつて、別にイシャラ (Ishara) すなはち穀物の室と呼ばれたからである。^{*} イシャラに包まれた靈が穀神セラク (Seakh) であつた。笑ふもの、笑ふ穀物の穂を意味するイザークを九年かゝつて生んだのも、ヘブライ史のサラ (Sara) であつた。そして、このサラは、たぶん、サベアの祖先なる古代の雜段耕作者ヒミヤリト人の親神サラー (Salah) と同一であつた。

ダグラス教授に従へば、支那の「年」といふ字の象形は小麥の穂であるといふ。^{**} 穀物の穂が歳の標識となるのは當然のことであつて、サルヂニアの父神サルヂヌ (Sardis) のごときもともと「年」を意味するといはれ、アルメニア語の Sard (年)、ペルシア語の Sal (年)、梵語の Sharad (秋分)、ローマの Salii (年祭) 等こつたがつてゐる。^{***}

さしするともちろん、サルヂスに名を興へたりデアの首府サルヂス (Sardes) はもとより前に述べたサンダン神も同じ意味を持つことが想像される。

サンダンは、貨幣に表はされたタルソスのパール神と同一であるとされてゐるが、その貨幣の像を見ると、手に葡萄の房と穀物の穂をもつて立つてゐる。サンダンはまた、女神キベレの子または夫なるアツチス (Atys) と同一視せられる。しかるに、アテネに於けるキベレの祭祀には鈴が用ひられた。さういふことから想像すると、西方に於いても曾つて鈴の祭祀が営まれたのでなからうかと考へられる。エジプトのオシリス祭にも鈴が用ひられたさうであるが、^{***}オシリスも植物神であつてその限りに於いて穀物とも結びついてゐたのであらう。

かうして我々は、鈴の祭祀はとにかくとしても、サナの豊産を祈る祭が過去のあらゆる堙滅のなから朧ろげに浮き上つてくるのを感じる。そして、その中心には神域の聖なる泉や樹があつた。サル神と同一視されるインドの風神マロチもしくはハヌマンには、樹の神たる一面があつた。^{*****}また、殺されたオシリスを探ねて母のイシス (Isis)

が漂泊する話のなかには、一本の樹がオシリスの骸のそばに生えてこれを包んだことが語られてゐる。しかし、別の話では、「柱の主」オシリスの脊骨の発見されたといふナイル河畔のダッツ市 (Daddu) に、毎年ファラオの供奉する盛大な祭が催され、「オシリスの脊骨なる柱のしるし」を立てる莊重な儀禮が行はれた。^{*****}このオシリスの祭に鈴が用ひられたと知るとき、その祭祀の實體がすでに朧ろげに我々の眼に浮んでくるではないか。

* Sayce, op. cit., PP. 245 note 6, 166 note 1.

** Douglas, R. K., *China*, P. 231.

*** Rawlinson, *Herodotos*, vol. i, P. 150 note 7.

**** Biscoe, J. P., *Curiosities of the Belyry*, 1883, P. 78.

***** Hewitt, *History and Chronology of the Myth-making Age* P. 161.

***** Budge, *Gods of Egyptians*, vol. ii, P. 152.

祭祀と聖所——たとへばセム族などの原始宗教を取つてみても、その祭祀の根元に聖なる泉または河、樹木、石などの存することが知られてゐる。この種の聖域は、畏怖して人の近づかぬ寂しい森のなかなどに樹と泉とを中心として選ばれたやうである

が、野獸などの出没する所がさういふ森林や流水のかたはらに見出されるために、ジ
ンのごとき鬼神の雰圍氣がそこにいつとなく形成されたにちがひない、とW・R・スミ
スは説いてゐる。^{*}

この説も一面を穿つてゐることはたしかである。しかし、ジンが主として蛇の形を
してゐると信じられたことの裏面には、我々の間に見られるやうな、樹や湧水を龍蛇
と結びつけるなんらかの儀禮が存したのかもしれない。私はラオコーンの元の意味を
考へる。湧出する生命の水は、大蛇となつて樹に捲きついて這ひ上る。そして、この
ぐるぐる捲くところに謂はゆるヅクの重要な意味があつた。^{**}水ばかりでなく樹も時と
して——本來はおそらくそれに纏ひついて這ひ上がる蔓樹^{***}を含めて——蛇になる理由
は、かういふところにあるのである。

『申命記』(一六・二二)に、「汝、エホバの壇のかたはらに、いかなる種類の木のアシエ
ラをも樹つべからず」とある。このアシエラは、立木であつたり柱であつたりした
のであらう。壇は自然の石であつて、これに犠牲の血が注がれた。立てたこの石も、

それみづから崇拜の對象であつて、おそらく生成の觀念を含んでゐた。

また、我々のトンドの火、左義長等に類する火の儀禮がやはり行はれたらしいこと
は、聖泉によつて知られたアラビアのアアスカ (Aphaka) の祭に火の玉が現はれたと
いふ傳説などに幽かに窺はれる。オロンテス河の洪水を止めた火の玉やヒエラポリス
の獅子神の天から降る火の玉も、これに類するものであつたとおもはれる。

このやうに洗ひ出してみると、我々とは最も異質の文化を有するセム人の間にさ
へ、たとひ内面的にでなかつたにせよ、我々のそれと同系の祭祀がかなり移植された
ことを知ることができる。太陽民族の在る所、世界の到るところにこの系統の崇祀が
營まれた。ただ、北歐まで行く間に、容易に人の近づけぬまた近づいてはならぬ聖所
が迷路になつたり、聖樹崇拜がドルイド教のごときものに變つたりしたのである。

* 前掲『セム族の宗教』上巻二一九頁。

** 日本語のトケロ(を捲く)、ツケラメ(蝸牛——九州東邊の方言)、鱗ヅク、漢字の軸、軸、索など、すべ
てここから來てゐる。アホロヤ(も)、Apollo Agneusとしてもともと先端に布を巻いた柱であつた。

*** ツル(蔓)といふ語は、たぶん、ツラン民族の *tsur* (聖柱) と無縁ではない。蔓は布片(幣)や綱(蔓)

と本来は同語)に變り、人々がそれを引つ張つてぐるぐる廻つたりした(メイボール・ダンス)。カルデアの Tyre になると、はつきり廻轉柱の意味があつた。英語の *gyro* もかういふところから生れてゐる。「吊るす」といふ語は、柱にいろいろなものを下げるところから生れた言葉であらう。

*** W・R・スミス、上掲邦譯書、二八九頁、註。

一一一

日本の神々と傳統——古代日本のおそらく最も一般的な神の一つに、各戸に祀る田の神——季節によつて山の神となる——の氏の總社として、森のなかの湧水のほとりをただ一本の神木だけを殘して伐り拂つた幽邃な神域の充てられたものがあつた。枝々には幣が張られ、鈴、鏡、劍、玉等が懸けられ、その前にふつう丸い石が置かれる。

山間から漸次に平野に進出した日本の農業にとつては、そこは開拓や交通の前衛基地であり、その神がサビ、サベもしくはサバの神であつた。これらの語は鐵をも意味してゐるから、開耕は單に土地が肥えてゐるとか水利の便があるとかばかりでなく砂

鐵採集の可能な所に選ばれ、この神がかたはら鍛工神としての機能をも帯びたのであらう。

ともあれ、この神が佐倍サベの神すなはち道祖神であり、また西國に廣く分布してサンバイ、サバイ、オサバイまたはウサバイと呼ばれる神であつた*。丸い石や若木または桿の外はこの神に格別なお姿がないのであるが、と云つてももちろん拜物的對象でもない。そのなかには、土地を拓いた父祖の魂が現實に生きて息づいてゐる。古い風習にも、サバを取ると稱して飯の初穂を取りこれに箸を立てたりする例があつた*。佛家では鬼に供するものとしてこれを鬼取りと稱し、鎌倉時代になると毒味することを鬼飯と呼んだくらゐであるが、本来は、父祖代々が孜々として續けてきた努力や蓄積の前に額づくことであつた。

個人主義的で功利的な單なる祖廟の報賽と異なり、また人間から隔離して近づくことのできぬ超絶神の信仰とも違ふ、我々に獨自な神の祭祀の一端が、かういふところにも窺はれる。それは、血統のつながりを豫想するだけでなく、民族共同の連帶によ

つて營々と弛まず擔ひつづけられた努力を承け繼ぐところに成立する。この努力の莊嚴な流れのために我々は喜んで捨身するのである。

我々にはかうして神々との間に絶対に越えがたい距離は存しない。傳統の座にたつた者の達し得た信念の激しさによつてしばしば神々をすら叱咤する例があるばかりでなく、捨身の業によつてみづから神の一人となることもできる。そして、かういふところにも我々の傳統の比類ない特質が耀いてゐるのである。

* サバイ神は佐倍神をさう俗訓したものにちがひない。なほ、桂井和雄氏の『田の神としてのサンバイに關する資料と論考』や早川孝太郎氏の『田の神・山の神』、『國學院雜誌』第四十七卷第十號)等を綜合してみると、湧水の地を選び、且つ叢林があり、樹木を——時には鏡をも——神體とする、といふのが根本の特質のやうである。

** 『倭訓栞』(前編)によると、度會氏の説に、豐受大神宮御饌殿の院内にサバ壺あり、小箱を置いて朝夕御供のサバを入れるといふ。

民族文化の特質——支那に於いても、祖廟を奉養することのきはめて篤いことはよく知られてゐる。祖先をこのやうに重んずる風習は、さらにその家族主義と敬老思想とによつて支へられる。しかし、そこには縦の關係があるばかりで、全體のつながり

が存しない。したがつて、個々の間が深く分裂し、そのそれぞれの魂が荒涼たる孤立に包まれてゐる。そこでは、祖先を重んじ家老を敬ふのも、結局は個に歸着する功利的な思想にもとづいてゐるのである。

しかるに我々は、個々のかういつた分裂を知らない。個と個との相互の限界は全體のなかに没し、その窮まりない満々たる流れに於いて自己が捉へられるから、したがつて古代日本には死といふ概念が存しなかつた。たゞ後に死と呼ばれた現象を、常世といふ永遠なる緑の青春の國へ去ることゝ考へた。マレイ人の短詩を見ると、死ぬことゝ潮がおのづから満ちてくることを同じに見たらしい思想に出會ふが、我々の祖神たちもまた、死の現象をもつて明るく湛へて溢れかへる命の満潮に還ることゝしたのであらう。「死ぬことゝ見つける」(葉隠)とき、櫻花のごとく喜々としていつせいに散り敷く所以である。

かうして、神統を軸としてその周邊に麗かに咲き且つ散り敷くところに、神ながらなるますらをの道があり、今なほごく平凡なこととして我々の間に承け繼がれてゐる

る。個と個とのまた生と死との分離がないから、その魂は目醒めるばかり無垢純潔で若々しく、内に自然の清冽な泉を湛へてゐる。

死の概念のない所には、生を個別化して永久に傳へようとする *ars longa* の思想が起らない。インドの前ムンダ人が原則として石で人間の像を彫らなかつたことは前に述べた。これは、社會構成の反映と相俟つて我々の國にモニュメンタルな文化を築かしめるに至らなかつた。かういふ現象を目して日本の文化が貧弱であると嘆く人も少くないが、その見方は、「倫理」の思想がないから日本は禽獸の國だと考へた近世の或る愚かな儒學者の説に似てゐる。文化の可視的足跡だけを文化と考へる人には、ギリシアのそれを初めて止揚すべき我々の新しい文化の世界史的意義をつひに理解し得ないであらう*。

*拙著『民族文化の課題』参照。

支那のツク語類(一)——ツクの御柱のことは先に述べた。それは、生命力の瀾漫と横溢を讃へる祭祀である。支那にも曾つてこの思想があつたことは、タク、チク、

チャク、チヨク、テキ、トク、サク、シキ、シャク、シヨク、シユク、セキ、ソク(および以上に濁點を附したもの)等の音を有する漢字のほとんどすべてに就いて見ることが出来る。

たとへば、生そのものを保つ「息」、鮮新な生の力なる「若」、生の完成としての「熟」(直接には火にかけ得られること)、力に溢れておのづから肢體の動く「躍」(古音テキ)、若々しい力に充ちた「犢」、たね牛を意味する「特」、そこから由來した「獨」、男の性器を指す「翠」、そこから轉じて草木繁茂する谷を指す「藪」(古音ソク)「澤」、根より立つ生命力としての「植」、天を指して繁茂するかたちの「藟」*、同じく繁茂を意味する「藪」[簇]「殖」、そこから人間に轉用された「俗」[族]、ツクのある動植物の「雀」[鵲]「鵲」[翟]「蜀」[竹]「筵、筑、笛」[菽]「荻」[哲]、命を支へる糧としての「稷」[粟]、轉じて「食」[粥]「鬻」[糶]「穡」等は云ふまでもない**。

「德」も力に充ち溢れて旺盛なことで、その結果が「得」であつた***。しかし、徳が帝(古音トク)と結びついたところに、我々とはすでに決定的に世界觀を異にすること

を知ることができる。祭祀に於ける「祝」「式」「鐸」「卓」「僮」「石」「槩」等は當然であらうが、「策」に至つてはさういふ差異をはつきり見て取ることができる。策は巫占の示すところのもので、これを札に示した。この札が同音の「冊」である。天子もこの冊に據つて立ち、これにもとづいて「勅」を發した。勅は策の力である。冊に記すこと或ひは記したものが「識」であり、これを解することを「讀」と云つた。なほ、巫占は「筮」によつて行つた。筮を入れる筒また「續」であつた。

このやうに、文字をただ列べただけで、古代支那に於ける王の冊立の情況がかなり髣髴としてくるではないか。それは、天つ日嗣としての御即位とはあまりにも懸け離れた觀念であつた。ツクの語に先住者の影響が見られるとはいへ、これらの文字が出来た頃には、すでに巫筮によつて首長を卜する雜種族の聯盟國家に入つてゐたのである。

* 高く立つといふ意味から「設」「個」「俸」——轉じて「碩」——が出、さらに「陟」になり「擢」「擢」(日本語スグ)になつた。

※ 活動は労働の觀念と結びつき、手による工作一般も同じやうに呼ばれた。「夔」はオノマトープかもしれないが、「爨」は日本語の「ト(解)く」に通じ、ここから「釋」(これも日本語と同類)「嚙」が出てきた。「琢」も「積」も本来は單に「作」(日本語ツク)で、「捉」(日本語ツカむ)「拮」(拮)「擿」はまた「東」(日本語ツカ)——轉じて「督」(日本語ツカサ)——から「築」(日本語ツク)、「蓄」(日本語タケ)になつた。手に収める意味から「酌」(日本語スグ)、「杓」にもなつてゐる。さらに、日本語に多く共通するものに、「鑿」「啄」「刺」「鏖」「拆」「析」「拓」「剝」「削」「炸」「剔」「磔」等があつた。

支那のツク語(二)——生命の座もツクであつた。日本語のトコ、トコロ、敷く等に通じる「席」「蓆」「簀」「簀」「蓐」からそれは「蹠」になり、また「宿」「宅」「塾」になつた。

また、その位置を中心とする物の遠近や移動もツクに關係した。たとへば「假」は起動、「熄」は終動であつた。「卽」(日本語ツク)——轉じて「着」(同上)「屬」(同上)「觸」「惹」「囑」等——「側」「直」(日本語スグ、ヂキ)、「續」(同ツク)等から「促」「拂」「戚」になり、さらにそこから「速」「夙」「倏」に進み、「窄」「蹙」「肅」「縮」または「逐」に轉じた*。

かういつた物の移動は生命の氣息につながるといふ「汐」に關係してゐるらしいが、

立ち去るものに寂寞のひびきが漾つてゐるのは何故であらうか。「鴻」「積」は潮や水の立ち去つたところ、「寂」は物の立ち去つて空なるかたち、「跡」「蹟」も立ち去つたあと、「昔」は立ち去つた過去、「惜」は立ち去られた感情、「仄」はかたはらに去ること、「夕」は日の去つたあと、「夢」は物の去つて寂たるどころ、墓の穴、夕、「昨」は立ち去つた日、「瘠」は肉の脱落、「弱」は活力の減退、「槭」は葉落ちて枝の空しいかたち、「禿」も葉散つて地の見えることで、「赤」(楊)も同じところから來たのであらう。

また、行き盡して物のたゆたふかたちが「彳」で、「躑」「躑」「蹠」にも同じ意味があり、そこから不安と憂懼を指す「惕」「怒」「蹠」等が出てくる。立ち去るものに荒涼たる寂寞のひびきがあり、迫り近づくものに苦しい逼迫が付きまとい、ここにまた行き悩む感情がある。さういふことを考へ合せると、「毒」「責」「謫」などはとにかくくとしても、生命力過剰の現象が「匿」(秘すべき不淨、邪惡)、「辱」「黷」(汚辱)、「衄」(惡血)、「瀆」(不淨の流れ、溝)等の汚辱の觀念に結びついてゐるのも、決して

て偶然でないとおもはれる。我々のヅク語彙にはさういつた觀念がふしぎにはほとんど含まれてゐない。大陸の民は、歴史の遠い曙の日から魂の深い荒廢を経験してゐたのである。

*「足」から「適」や「迪」が生れた。適は行くことで、行つて當てはまるから「嫡」(嫁)の意味を持ち、「的」「鎭」「鏃」「射」もさういふところから來た。「擲」「匿」も物の移動、「借」は所有物などの移動で「囑」「託」「贖」に通じてゐる。

** 行き盡して物が限界に達するのを「塞」と云ひ、「柵」「斥」に通じてゐる。日本語でもセキ(關、堰)、セキ(漢字も塞)、サカ(坂)、サカヒ(境)、シキミ(關)、サガ(性——人個々の限界)等がこれと同類である。

國語に現はれた民族性——日本語でも、福士氏の謂はゆるヅクの御柱から起つたこの語類は、もともと祭祀に關係して「イ・ツ(齋)く」、「ツキ(杯)」、「サケ(酒)」、「ツクエ(卓)」、「スギ(杉)」、「サカキ(榊)」等になつてゐるが、「ツガ(梅)」、「ツグミ(鶉)」その他の動植物を初め、「サカエ(榮)」、「サカリ(盛、旺、熾)」、「サキハヒ(幸)」、「シキリ(類)」、「スコブル(顛)」、「タケナハ(酣)」、「シゲ(繁)る」、「スコヤカ(健)」、「タクマ(逞)し」、「スゴ(凄)し」、「チカラ(力)」、「タ・ス(助)く」、「タ(長)

く、「スグ(優)る」、「サカ(賢)し」、「タケ(武、猛)し」、「タケる(男性としての力の発動)」、「ツガ(番)ふ」——轉じて「チギ(契)る」——「タケ(噴)ぶ」、「サケ(叫)ぶ」、「シカ(叱)る」等に生命力横溢への旺んな信仰を奉じてゐる。

しかし、「トガ(咎)」があり、これに對する「ツグナヒ(償)」はあつても、支那に於けるやうな汚辱の觀念はみぢんもない。むしろ、ツクに溢れてゐることは「スガスガ(清淨)しい」ことであつた。

「トコ(床)」、「ソコ(底)」、「トコロ(所)」、「シ(敷)く」等を初め、この位置を中心とする「チカ(近)し」、「チキ(直)」、「ツ(即)く」、「ツ(附)く」、「ツ(就)く」、「ツ(屬)く」、「ツ(次)ぐ」、「ツ(繼)ぐ」、「ツ(着)く」、「ト(遂)ぐ」は支那とほとんど共通してゐるが、物の立ち去ることにはわづかに「ス(過)ぐ」、「ツ(盡)く」——轉じて「ツグ(噤)む」——といふ簡潔な語があるだけで、一抹の荒涼、一點の寂寞もない。むしろ、「トキ(時)」の流れそのものがツクの最古の根元として「トコシへ(永遠)」に緑の青春を湛へた「ツキ(月)」であり、死すらもそのツクの世(常世)にまかることであ

つた。

支那文化の最も優れたものの一つは詩歌であり、それは藝術であることによつて民族性を超えて我々を強く打つが、『唐詩選』などを讀みとほすのに堪えがたい思ひをするのは私だけであらうか。何といふ蕭條たる物悲しさがその詩人たちを占有してゐるのであらう。

海盡きて邊陰靜かに、

江寒うして朔吹生ず。

更に聞く、楓葉下ちて

浙瀝として秋聲の度るを。

ほとんど到るところにあるかういふ表現を見ると、悲風おのづから胸に湧き幽かに骨の鳴る思ひがする。大陸の民は、書契の用ひられはじめた太古の頃、すでに魂の荒廢を映す無限の寂寞に面し、後向きの歴史觀を組み立ててゐたのである。***

* ツクは日本語でも、労働や工作と結びついてゐる。「ト(鎔)く」は初め製鐵用語——「ツク(銑)」もそこか

ら—で、「ト(融)く」「ト(解)く」になつたが、もともと「ツク(作)る」「ツク(繕)ろふ」「タクミ(工、巧)」「と同じで、「スキ(鋤)」「——轉じて「ス(聽)く」「ス(透)く」「スキ(隙)」「——「タガヤ(耕)す」等になつた。「ツ(築)く」「ツカ(塚)」「デク(塹)」「タク(蓄)はふ」も同類であるが、その根元には地から立つもの(植)——「タケ(茸、ツクシ)土筆)もここから——の意味があつた。そこから「タカ(高)し」「タケ(丈)」「タケ(岳)」「タキ(瀧)」「タコ(風)」等が生れた。もちろん手を働かすこと一般に關係して「ツク(束)ねる」「ツカ(束)」「ツ(欄)」「タガ(籠)」「——「ツカサ(官)」「ツカ(使)ふ」「ツカ(仕)ふ」「ツカ(擱)む」「スガ(縫)る」「サグ(探)る」「ツ(突)く」「サ(裂)く」「ツ(削)ぐ」「ツコ(害)なふ」「ツ(搗)く」「ト(研)ぐ」「(尖)る、刺)もそこから」等がある。

*** 内的分裂を知らぬ眞の民族共同体にあつては、歴史は個人とともに進む。それは現在の上にあつてしかもつねに自由な未來(サキ—前、先)をひらいてゐる。サキハヒ(幸)の意義がここにあるのである。

一二三

「アジア的」荒廢に就いて(一) 私は前に、游牧民の軍隊による農耕社會の侵略と征服に就いて語つた。しかし、征服された民は、屈辱に抗し得ずにこれにまみれる者の

最も厭ふべき歪んだ絶望感をそのまま支配者に植えつけることによつて、いつとなく必ず復讐する。奴隷を底邊として天への階段を築かうとした試みは、睡となつてふたゝび支配者の面上に落ちてくる。侵略的支配者の蒙るこの運命は、すくなくとも「アジア的」社會に於いては、ほとんど不變の通則であると云へる。

初期の『ヴェーダ』にそれほど陰鬱な厭世觀がなかつたことはたしかである。しかし、アーリア人の全き支配が確立した頃には、生や世界の實相がそのまま避けがたい苦であると説く思想が完成してゐた。生が苦の根源であるとすれば、幸福はただ、生からの解脱に求められる以外にない。しかし、肉體的に死滅しても、生の否定としての涅槃には入れない。死にはどこまでも輪廻轉生が附いて廻るからである。したがつて、生死からの死、永遠の死こそ、眞の淨福としての涅槃である。

この種のベシミズムが一「哲學者」だけの思辨にすぎないのなら問題はない。しかし、それが三千年にわたつて民族の全生活を決定的に曳きすつてきたと知るとき、その世界觀の非人間的な冷たさに我々は今さらのやうに慄然とする。

佛教は、婆羅門の教へる恒常のアートマンを否定し、無我を實現すべき一つの新しい實踐哲學を建設した。謂はゆる緣起説によつて現象界の流轉が無明にもとづくことが詳しく分析的に説明せられ、無明から覺への轉換をめぐつて智と信との融會が指し示された。

在來のインド宗教に比して佛教がこのやうに實踐的であり、また或る程度まで現世的であつたゆゑに、それはかへつて發生地には榮えなかつた。それは、典型的な「アジア的」民族なるインドや支那に深く根を張ることができず、むしろ中間のビルマ、タイ、日本などにそれぞれ特殊化して榮えたやうである。とはいへ、それにしてもその深刻な厭世觀、非人間的な法の思想、超地上的、超歴史的な立場に變りはない*。

* インド思想を民族的社會的構造から分析してそこから佛教派生の根據を突きとめる試みは、たいへん重要なことであるが、まだなされてゐないやうである。

「アジア的」荒廢に就いて (二) — 伯夷叔齊の昔はもとより漢の制覇が成つた後まで、我々の武士道にも近い純潔にして壯烈な氣象が、また支那の一部には残つてゐた

やうに見える。漢の一統に抗して項羽の指揮下に最後まで戦ひぬいた呉人の意氣は、ふたたび呉楚七國の叛亂となつて現はれ、後漢末に於ける三國吳の擡頭によつて民族的氣概をみたび宣揚してゐる。漢末に於ける後趙の石勒、後燕の慕容垂のごとき英傑は、吳その他の邊疆民に流通した雰圍氣に影響されるところがあつたのであらう。

しかしまた、一方、支那の民族性は、先に見たやうに書契成立の時代にすでに抜きがたい根を下ろしてゐた。もともと雜居的郡落のうへに專制權力が蔽ひかぶさつたのであつて、民族としての團結意識を伴つてゐないのは當然である。支配權と自己との間になんら親縁的紐帶がなく、しかもその支配權がほとんど強掠的な爭奪の對象となつたので、民の心理のうちには、宿命論的個人主義とでも稱すべき一つの荒涼とした意識が生ずる。したがつて、たとへば『魏志』の時代に、東夷に接した支那の商人がその民衆の道德的秩序に驚嘆してゐるくらゐで、中原の民は、歴史の曙のころからすでに深く荒廢し、内なる自然を失つてゐた。その羨望した東海の扶桑國（日本）に生れたとしたら、孔子も『論語』を書く必要はなかつたのである。

支配形態が謂はゆるカストとして宿命的に階層化されたインドと違ひ、易姓革命を常とした支那では、超越的彼岸を夢みる陰鬱なベシミズムに傾くかほりに、天命の許すかぎり打算的に處生を策する道が考へられた。神を失つた或ひはもともと神のないこのやうな民の間に神話の成長が見られないのは當然である。

したがつてまた、民族形成の内的原理としての神話を缺いてゐるところから、歴史はそれみづから民族史としての主體的積極性を持つことができない。すなはち、それは、つねに後向きに捉へられ、政治の「鑑」として考へられる。民族からもまたその祖神への架橋としての神話からも切り離されて生きることを強ひられてゐるために、生活體はおのづから個を單位とすることになり、その個々を社會的に統一する政治に大きな力が生ずる。かうして、學問も道德も政治への馴致に於いて規定されるのである。[＊]

*拙著『民族文化の課題』参照。

「アジア的」社會の基礎——現代の小説などを比べてみてもすぐ氣づくことである

が、我々はどうやら國際的性格を缺いてゐると云へる。朝鮮のものと比較してさへ、この點はかなり異つてゐる。國際的性格は、切り離された個々の生活に起り得るすべての荒涼たる運命のまほりを彷徨する者の共通性から生れ、諸種族雜居の間に流通する貨幣のやうに浸透する。

それは、個の運命の孤獨と寂寞に包まれてゐるので、その性格を有する作品に接すると、我々は何かしら肅殺として迫るものを感じ、その背景に伸びた深刻な思辨の影に壓せられる。我々の間に昔も今も見受けられる深刻癖は、總じてこのやうな接觸から齎らされるのである。

しかし、注意せよ、この國際性こそは民族の網から切り離されたところに成り立つ個人主義の一側面にはかならないことを。そして、そこに附帶する深遠な思辨がフリドリヒ・ニーチェの謂はゆる「消耗的滅亡」の背の風穴に續いてゐることを。さういふ世界を「アジア的」停滯、無形式と稱して、ニーチェは烈しく嫌惡する。しかし、アジアといふ呼稱のかげに擴がるあらゆる沈滯、不潔、怠惰、虚無、專制的支配形

態、尨雜な雜居的群落、宿命論的な個人主義等は、ニーチェ以上に我々にとつてこそ同感に價ひするものでない。

それらはいづれも、大灌漑を必要とした巨川の洲域、たとへばナイル、メソポタミア、インダス、ガンガ、黄河等の沖積平原にひらけた文明の所産であつて、我々とは根源的にその類型を異にする。

沖積土を踏んで初めて原始的農耕を營んだのは、どこからともなく集まつて來て粗らな雜居的聚落を形成した多くの小部族であつて、やがてそのなかに或ひはかたはらに割り込んだ游牧民との混合はあつたものの、ほとんど悠久的に反覆される停滯的生産が杳遠の太古から久しく續いたのであらう。しかし、この涯しない反覆のうちにも、洪水に襲はれるとたちまち耕地を棄てて四散したこれらの農人たちの間に、年々河床を高めて氾濫する河水を少しでも修めようとする欲求がやがて起つてくる。かうして、灌漑が決定的な意義を帯びて登場するのである*。

* 前掲拙著参照。

民族形成の根源的差異——河川の灌漑には大規模の協業を必要とするために、氏族の小さな聯合から始まつてつひには種族同盟としての國家が形成せられる。かうして、治水の徳が帝位を決定したのであつて、誰であらうとその徳によつてトせられた者が禪讓を迫るなどといふことは、我々にはとても考へられないことであるが、民族に共同體の性質が缺けてゐるからさういつた功利主義は當然であつた。そこには民族自體の擔ふ主體的な歴史意識がなく、ただ絶對のものとして非人格の荒涼たる天命が働くだけである。

しかも、さういつた功利主義は、沖積的平原の灌漑を通じて集中的な權力の干渉をかへつて誘致し、こゝに謂はゆる「アジア的」專制政治の形態を成立せしめたのである。

この點で、我々の國は根幹的に異なつてゐる。周知のとほり、古代日本に於いては河川の灌漑でなく池溝による灌漑が行はれた。彌生式土器の分布、古文献、堅穴式石室、高塚の分布などから考察するなら、最初の開拓が沖積層でなく河成段丘に行はれ

たことはたしかである。すなはち、溪谷の出口に防堤して地溝を造り、これを漸次に下方へ導く謂はゆる籬段耕作を取つたのである。

これはごく小規模な協業で事足りたので、共同体の緊密な統一がどこまでも破れなかつた。むしろ、農耕が漸次に平野へ進出して垂仁紀に「諸國に令して池溝を開らしむること數八百」と語られ、大化以後、殊に奈良朝後期に至つて河川の治修がしきりに行はれるに至つても、薄れかけた全共同体への復歸の自覺がかへつて幾重にも鍛接し返されて、日の皇子を御中心と仰ぐ共同体の構造はいつそう緊密なものになつた。無窮にゆるぎない國の礎石がここに全く据ゑられたのである。

日本に於けるこの籬段耕作はすつと後世までその系譜を傳へ、それに伴ふ土木技術者がクロクワと呼ばれて今に紀州の山間に残つてゐることが福士幸次郎氏の報告に見えてゐる。^{**}この耕作法の發祥地は明らかに南東アジアで、太陽祭祀を背景とし、鐵の文化と結びついてゐる。すなはち、この耕作法を取つてゐるのは、砂鐵層を追求して海岸の丘陵部から奥地の山間へ入つた製鐵民族であつたのである。

* さういふ階段耕作地が信濃國のシナである。仁科は丹のシナ、明科は赤シナ、保科は秀(山頂部)のシナ、神科は上シナ、倉科は急峻なシナ、更科はたぶん小盆地を有するシナである。といつて、信濃だけに階段耕作が營まれたわけでない。古代日本の農耕は、すべてこの籬段式によつたのである。後に山間の耕田を「上田」(下田、室田に對する)と稱した。「アガタ(縣)」はたぶんここから出た言葉であらう。

二四

海に還る——最近、或る新聞の通信でバプアの矮人族のことを書いたものなかに、彼等の腕が逞ましいのに比べて脛が細く弱いのは、舟ばかりで往來するためらしい、とあるのが目にとまつた。^{*}鐵に關係ある傳説的人格——他民族から見た——がふしぎに矮人で足がわるかつたりまたそのいづれかであつたりするからである。

製鐵民族は、前に述べたやうに、海の民族であつた。鐵の創造をその一章に語るフィンランドの叙事詩「カレワラ」のなかで、金屬づくめの服裝をして手に斧を持つた侏儒がワイナモイネンに「わしは海洋を治める者だ」と名のつてゐるが、この暗示はきはめて興味ふかい。日本人も、大陸から見た場合は矮人であつたにちがひなく、矮

すなはち倭で、まさしく海洋の民であつた。我々には、游牧民に見られるやうなあの廓寥たる天の觀念がない。否、天は水天髣髴たる一體に於いていはば海の延長として捉へられ、初めは同一の名で呼ばれた。區別が出来たのは後代のこと、初めは海も天もまた雨も同じであつたのである。

我々の祖神たちは、日本列島の土を踏んでから、あまりにも豊富な砂鐵層に蠱惑されたものか、いち早く舟を捨て、しまつたもののやうに見える。しかし、忘れられた阿曇氏の水夫たちの名が三韓遠征の際に突然——磯良丸を通じて——蘇つたのを見てもうかがはれるやうに、あらゆる記録から漏れてしまひはしたものの、海上の能力はどこか一部に呼吸しつづけ、國の對外的危機に際してつねにそれが決定的な役割を演じた。そして、その時を槓桿として民族の活力が復活し、ふたたび新鮮な廣い展望が現はれてくる。黒潮の汪洋たる大循環のなかにこそ、日本の運命は懸つてゐる。それゆゑに、この潮に溶することによつてのみ我々の總身の血は初めて爽かに回るのである。

今は絶滅したタスマニア人 (Tasmanian) が航海に巧みであつた事實は、南海の民がすでに舊石器の時代から航海に慣れてゐたことを示してゐる。かうして、他の國をして水泳界の王座を窺せしめない日本の實力のうしろには、悠久數千年の傳統の隠れてゐることを忘れてはならぬ。「十二月八日」の捷利も決して突發的に成つたものではないのである。

*『東朝』一七、一、二九夕刊。

海の民族とその文化傳播——世界最初の文明は海邊に起つた。それは、海によつて運ばれ、海光の揺れるところに成長した。たとへば、ユルシカ海岸のドルメンのごとき、ラッツェルの言葉を借りれば、「航海者がこの死者の安息所を、海を見下ろすやうに建てたのであらうと、いきなり考へられるほど目立つてゐる」といふ*。そして、その文明の發祥地はおそらく南東アジアであつた。

この文明を擔つた金色の民族は、鐵や銅の使用を知り、籾段耕作による農耕を營み、太陽の子を中心とする緊密な共同體を組織し、ドルメン、メンヒル、クロムレク

等を構築し、日の祭祀を行つた。日の祭祀は、ひとくちに云へば、太陽のヅク(活力)を生活に迎ひ入れる祝祭で、笑ひの儀禮を伴ふ春の復活祭をもつて始まる。そして、それらの祭祀の中心には樹(または柱、杙、桿など)があつた。樹は火(日)と水(雨)との交流の座として雷電および龍蛇と結びつけて考へられた。源に龍蛇のみそむオロンテス河の火の玉も、火の玉となつて遊行する蛇體の「一目連」(多度山権現)も、明らかに同じ系統の信仰から發してゐる。

電載となつて飛ぶこの火の玉が太陽の活力であると思われ、日本の左義長に類する猛烈な火の行事もあつたらしい。道祖神を祭るトンドの火もしくは左義長の火の行事は、味柑、鏡、扇子等を上端に飾りつけた高い竿に火を懸けて焼くのであるが、福士説によれば、猿田彦神の異様に光灼したお姿はこれを形象したものであるといふ^{**}。しかるに、前に述べたインドの樹||猿の風神サルと同一視されるマロチを父とするビムセン(Bhim-sen)は、同じく樹||猿の神で、頭を赤く塗つた杙をもつて表はされた^{***}。また、ラテン神話の聖鳥なる頭の赤い啄木鳥ピクス(Picus)も、本來はガルダの棲ま

る聖柱ラート(Lat)であつたらしい^{***}。フィンランドやゲルマニーの寶を守る赤帽の小人レブリコウンと無縁でないこの啄木鳥はまた、北アメリカのアルゴンキン諸部族の間に於いても聖鳥であつた^{****}。

とにかく、このやうな一端に觸れただけでも、世界的にはほとんど同一の太陽祭祀が曾つて廣く傳播したことがわかる。それは海によつて運ばれ、鐵民族の奉ずるところのものであつたのである。

* 市川誠一氏譯『海洋論』八八頁。

** 上掲論稿『大民』一五、一一、一一参照。

*** Hewitt, P. xl.

**** *ibid.*, p. xxix.

***** Ieland, *Etruscan Roman Remains*, chapter of Red Cap (esp. pp. 162-4)

太陽文化の榮光——アジア南東の海邊から出發した鐵の民族の一分派は、タイを圍むメコンとサルインの流れを溯つた。彼等の國は好戰民族の南下と中斷によつてこれに吸収されてしまつたが、これには鐵に禍ひされるどころ大なるものがあつた。しか

し、彼等のうちの先發者は、そのすつと前にアルタイ地方に入り込んでゐた。

インドに上陸した大部隊は、或ひはアッサムに留まり、或ひは南部の丘陵に向ひ、或ひはまたガンガを溯つて北インドに向ひ、また迂回してカンベイ灣に着き、謂はゆる阿修羅族としてアリアン侵寇以前の全インドを支配した。また、その文化に接して混血した北方系の一隊は、すつと後に、アリアン侵寇の始まりかけた頃、ヒンヅクシ南麓のカブールからおそらくカピルの塩沙漠の北に抜けて裏海の北西岸に向つた。もちろん、カラコルムやヒンヅクシの大山壁を迂回して北方へ向つた者も考へられるであらう。

ペルシア灣に現はれた一隊は、或ひはエラム山地に入つてベルセボリス附近に進み、或ひはユーフラテス河口の農耕村落を刺戟してスメール・アッカド文明を開花せしめた。アラビアを迂回した一隊は、南岸のハド라마ウト (Hadramaut) 地方に入つてヒミヤリトの地に典型的な雑段耕作の址を遺し、他の一隊は對岸のソマリランドからさらに南下し、また他の一隊はアビシニアに上陸した。また、バレスチナに現はれた

一隊は、エジプトを刺戟して壯麗な文明を出現せしめた。そこからさらに西海へ立ち去つて北歐にまで達したことは先に述べた。

かうして、人類史に最初の高度な文明を世界に廣く傳播した者こそ、南東アジアの太陽民族であつた。もちろん、インド以西に太陽巨石文化を齎らした者を直ちに我々の同族だなどと主張したら、スメール人を大和民族だとする一部の人々の見解にも類してくる。

しかし、この燦爛たる南海文明の大傳承がほとんど缺けることなく我々の國に傳はつてゐることに、一點の疑問をも挿しはさむことは不可能である。太陽文化は世界的に流布したとはいへ、今もつて「日のもと」を國號とし、日の女神にまします天照大神このかた悠久數千年の天つ日嗣を誇り、日の丸をかざして日の皇子の國の彌榮を壽ぎ、また下、土俗のはてまで日の祭祀をもつて満された民族が、世界のおよそどこにあらう*。

* かういふ莊嚴な主體的事實を無視するところに、現在の妙な「科學的」迷信があるやうである。

日の宗祀と南海——我々の祖神は海から現はれた。スメル山の秀麗な姿を仰ぎ、クラカタウの赤い噴煙を左に眺め、マレイを経、黒潮の背に乗つて支那海沿岸を北上し、江淮と山東の間に上陸し、一部は勃海灣をめぐつて韓半島に到り、さらに宗祀を奉じて日本列島に辿り着いた。歡呼しつつ東海の浦曲に注ぐ黒潮に澡して大陸の塵を洗ひ落した祖神たちは、四季鮮かなこの美しい朝日の國に、いかに讚歎の聲を發したことが。

民族の移動はいはば國覓ぎのためであつた。したがつて、甚だしく砂鐵の豊富な、その他の生活條件にも恵まれたこの列島を見出したうへは、もはや移動の必要がなかつた。寶祚無窮の神勅が日孫御降臨に際して發せられた所以である。

反逆した天使たちが天から投げ落されて或る者は地獄に落ち、それほど罪の深いないは空中や水中に投げ散らされて侏儒や矮人や坑鬼トウキになつたといふ北歐の傳説がある*。事實、北歐ばかりでなく世界のどこに於いても、太陽の子たちはいつとなくちりちりに四散し衰滅してその足跡すらもことごとく消えてしまつた。宗祀はおそらく阿

修羅族と大和民族とによつて東西に分れたものであらうが、阿修羅の後裔が漸次に大陸化して頽廢した末に侵略によつて亡び去つたとき、東方の宗祀がひとり日本に遺つてその連綿たる神統を今に誇つてゐるのは、たしかに世界史のうへの一驚異である。そして、それは、大稜威とこの國土の感歎すべき地理的位置とによること勿論であるが、豊富な砂鐵に負ふところまた決して少くはないのである。

しかし、氏族社會の崩壞後、大陸文明が滲透して封建制の桎梏のもとに精神的敗血症に久しく悩んだ日本は、西歐の資本主義をたまたま採り入れて更生を圖つたのであるが、この西歐の機構が封建制をもつともつと悪く裏返しただけにすぎないことがわかつたとき、我々はふたゝび黒潮の回歸のなかに身を置いた。日輪のもとに惜しみなく開かれた南海の島々への進出こそは、まさしく母なる國への巨いなる還元である。そして、大東亞戰爭の雄渾にして壯重な意義もこゝにあるのである。

* Thomas, J., *Universal Pronouncing Dictionary of Biography and Mythology*, 1871, vol. ii, p. 2151.

南への郷愁——『丹後國風土記 逸文の浦島子の歌に、

常世邊に雲立ちわたる……………

絶ゆ間なく、言ひは繼がめど

われぞ悲しき。

私はこゝに譬ひやうのない民族的郷愁を感じる。「絶ゆ間なく言ひ繼ぐ」こともいつとなく忘れられてしまつたとはいへ、南への切ない郷愁は、曾つて我々の胸から絶えたことはなかつた。

私は曾つて書いた、「……我々は近來、太平洋に向つて民族の激情を湧き立たせる現實的機會に恵まれなかつたために、南海にそれほど目を注いで來なかつたものゝ、ひとたび點火すればこの激情がいかに人を捉へるか、また南の蠱惑に捉へられた人たちがいかに烈しく切ない郷愁を感じてゐるかを、私はひそかに知つてゐる。しかも、さういふ血の證明にこそ、眞に謬たないものがあり、國家千年の計の最も素朴な指針もまたこゝにあると思ふのである。*」

南洋と云へばすぐ「生命線」といふやうなことだけを説く一部の人に、私は警告しなかつたのである。經濟的にそれが需要だから抑へるでは、インペリアリズムと異なるところがほとんどない。何と「使命」を合理化しようと、インペリアリズムに據つて立つた國家は、そのインペリアリズムのために判で押したよりも正確に必ず滅亡する。新秩序の眞の意味は、世界のあらゆる地域をそのそれぞれが本來在つたところの各自の傳統的世界圏に解放することにある。すなはち、廣い意味に於ける祖國への還元にある。したがつて、それとドイツ地政學との相違は、何よりもまづ民族傳統に決定的意義を置くところに存する。

現在の南洋諸住民のうちには、太陽民族の直系の末裔はほとんど居ないかもしれない。しかし、アンナン、モン・クメル、ビルマ等の諸民族はもとより、南下したマレー人——またタイ人すら——も、オーストロ・アジアの血液をきはめて豊富に傳へてをり、それゆゑにこそ榮光の「マタ・ハリ」を日章旗のもとに仰ぐのである。アンナン人やビルマ人などが我々と同祖だと信ずるのは珍らしくないが、たとへばミンダナ

オのダバオ灣西岸に住むバゴボ族 (Bagobos) のごとき原始的ネグリートまでが、始祖
サツダンの六男がタカマボンジ (Takamapouji) すなはち日本人の祖先だと言ひ傳へて
ゐるのは、興味あることではないか。南海人と我々とのこのやうな交流には、たしか
に何かがある。

* 前掲拙著八頁。

一二五

文化の新系譜に就いて——文化類型のうへから見て、日本の文化は、あまりにも獨
特であり、他との類同をほとんど絶してゐる。西歐文明がつひに崩壊し、新日本の世
界史的課題が切迫しつつあるとき、我々は、ギリシア以來の運動を止揚し得る文化の
新系譜をどこに求むべきであらうか。

人は舊來の東洋文明にと答へるかもしれない。もちろん、東洋としての舊い統一に
も、支那とインドとの間に南海の諸民族が介在することによつて單に「アジア的」と

のみ云へないものを含んでゐる。そして、その意味で、未來への諸要素を深く藏して
をり、曾つて我々の祖先たちがこれを攝り入れたやうに、そのなかから新しい啓示を
汲み取ることは必要でありまた不可避であらう。

しかし、主導的な力はあくまで我々自身のうちに求められなければならぬ。今日、
人道主義の感傷家たちは、日支同文などと稱して怪しげな妥協と折衷の見地から望ん
だ曖昧な中間に東亞の新文化を夢みようとしてゐる。これは決して兩者のいづれにも
幸福を齎らすものでない。現象のごく淺薄なところだけを見て感傷的な提携などを考
へずに、民族悠久の運命を託すべき共榮圏の確立のために、我々はむしろ、文化類型
の根源的差異を前提とし、各民族の傳統をそれぞれ重んじて相互に深く研究すべきで
はないか。そして、そのためにまづ、自己の文化に對する信念を恢復する必要があ
る。我々の文化は、性格的にもと可視的、造形的な實現を差らひ、且つ觀念と思
辨の組織に乏しい。ひとくちに云へば、モニュメンタルな性質を有しない。そのため
に昔から海外文化を過度に尊重し、固有の文化と傳統をそれだけ惜しみなく破壊して

きた。孔孟の現はれぬ日本は禽獸の國だと考へた近世の或る儒學者だけを嗤ふことはできない。さういつた愚かな「文化人」は今でもたくさん見受けられる。しかし、その人たちが缺陷と考へるところにこそ、我々の比類ない優越が存するのである*。

*前掲拙著のなかでその一端に觸れておいた。

民族文化の主體——我々の國には今、西洋のインペリアルリズムを直譯した粗笨な世界統一の夢と、民族の文化的優越に對する否定的思想とが、互ひに凭れかかつて存在してゐる。そして、そのいづれも、民族的主體に就いての確乎たる信念を缺いてゐる點で同一である。優越の空虚な呼號は、かへつて貧困を宣傳する結果に陥つてゐるからである。

これには學者の罪も大きい。地上に於いてただ一つの完璧な天つ日嗣の國といふ莊嚴な大事實を忘れてしまふから、いつまで経つても民族を主體的に捉へることができないのである。たとへば、我々の民族的源流を知らうとする場合、ツングースその他の諸種族が交雜したものなどと聞かされるのが普通であるが、我々の高度の文化的

傳統を説明し得る鍵はもちろんツングース族などにあるわけがない。かうして、我々の祖先が民族に固有の文化を高く護持してゐたといふ信念を失ひ、雜然たる寄せ集めから成り立つたために民族文化の主體的な力を持たず、つねに外來の諸文化を攝取しただけだ、と信じ込まされてくる。

もちろん、ツングースが我々と關係の深いことは前述のとほりである。しかし、ツングースこそかへつて我々の祖先から派生したと何故に説き得ないか。これは單なる逆説ではない。この觀點の轉換はまさしく決定的である。ツングース族の北漸説と以前農耕説とは民族學でも承認せられつゝあるところで、おそらく彼等は、北漸して游牧化するに及んで、生活の據りどころをなした傳統を護る必要も力もなくなり、いきほひ民族的に退化しなければならなかつたのであらう。しかるに、傳統の背すちを抜かれたこの退化種族から我々が出てきたやうに考へるから、佛教や漢文化から蒙つた破壊や荒廢のすさまじさを少しも計算に入れないで、その恩惠の莫大だけを數へることにもなるのである*。

しかし、今や想起せよ、インダス、スメール、ヘテ、エジプト、エーゲ、エトルスカ、北歐等を刺戟して古代文化の撩亂たる開花を招いた者こそ、南東アジアの海邊に榮えた日輪と鐵の民族であつたことを。そして、この民族の傳統こそ我々の傳統にはかならないことを。

* 拙稿「民族文化の主體」(『三田新聞』一七・二・一七)。

ふたたび巨なる榮光の日へ——文化類型のうへから見て、日本の文化は、「アジア的」と云へないし、まして「西歐的」でもない。それは、すでに指摘されてゐるやうに、「アジア的」であるよりもむしろギリシアのそれに近い*。

しかし、このやうな孤立こそ新しい榮光の手形ではないか。幸ひなことに、アジア文明や西洋文明の執拗な來襲にもかゝはらず、太陽系の傳統は世界中でただ南海にのみ今なほ根強く残つてゐる。パーリ教授の『太陽の子たち』に列擧された現存の例を擧げるならば、それは太平洋の全域を蔽ひ、對岸に上陸して北アメリカや南アメリカにまで廣く擴がつてゐる。太陽文化のうちには、西方から來た系譜が織り込まれてゐる。

るので、この點に注意を要するが、それが今もつて亡びないのは、やはりその前に本來の太陽文化の地盤があつたからであらうとおもはれる。たとへば、バリー島のごとき、回教、佛教、ヒンヅー教などの角逐の激甚な所であつたにもかゝはらず、太陽祭祀の風習を今なほ傳へて失はないのである。

大東亞戰爭！ その囂然たる炸裂とともに、今や一個の巨艦と化して浪を蹴りつゝある祖國の前に、突如として南海の滿々たるうねりが展げてきた。そこは我々にどつて民族形成の縁の搖籃であり、またそこに還ることによつてのみ過去の燦爛たる太陽文明の誇りにおのづから我々は湛へられる。かうして、最も近い過去に於いてギリシア文明のみが匹敵する文化の新系譜が日本を中心としてやがて鬱然と興るであらう。

ギリシアの文化がいはいば單に空間的で生成の原理をそのなかに含んでゐないのは、その成り立ちから見ても當然のことであつた。我々には、しかし、ギリシア人に缺けてゐた傳統がある。神話の無限回歸がある。この神話の回歸は、主として民俗によつて支へられる。民俗は、或る種の知的遊民たちが考へるやうな無智からの單なる反覆

巴紋源流考



巴紋の源流考

ではない。繰り返すこと自體が悠久から悠久をつなぐ持續的蓄積であり、神話の光耀をはるかに反映しつゝ、その根源に現人神をめぐる國土の無窮を擔つてゐるのである。かうして我々は、我々自身の傳統を主軸とすることを忘れることなく、むしろつねにその高度に照して、黒潮の回歸するところ、全太平洋の夢ふかい金色の民をその熾々たる日輪の祭にふたたび抱擁し得るであらう。

*この點を考へても、アナトリアからエーゲ海にかけてその先住民の太陽系文化がいかに抜きがたい根を張つてゐたかが想像される。ギリシア文化の一面が我々に通じるところあるのは、このためである。これらの地方は丘陵多く沖積的平原がなかつたから、アジア化するに至らず、東方系の文化が根強く殘存し得た。ギリシア文化はこの幸福な地盤のうへに開花したのである。

梵語でスワスチカ (swastika) と呼ばれる卍の記號に就いては、多くの研究がなされてゐるにもかゝはらず、今もつてその起源や形成は少しも判明してゐない。資料の限られてゐる現在に於いてこれを明らかにすることは困難であるが、いま私は、その一變形としてのクロスとトリスケリオンもしくは極東の巴などを含めて、謂ふところの巴紋に關聯する古代文明の或る様相に少しく觸れてみたい。

我々の間ではまじと呼ばれるスワスチカは、佛教徒の用ひる象徴として知られ、佛教とともにこの國に傳へられたものとせられてゐる。事實、それはそのとほりかもしれない。ところが、スワスチカの一變形である十字の記號が古くから薩州の島津家に傳はつてをり、それが一つのささやかな示唆を投じてゐる。云ふまでもなくこの十

字紋は、切支丹の傳へたものとは全く無縁である。十字が咒符として用ひられたことは、支那ではすでに晋代に於いて認められ、たとへば『晋書』(一三)何僧傳に「蒸餅上不圻則不食」とあつて蒸餅に十字を刻する風習が存したもののやうに見える。沼田頼輔博士も記してゐるやうに、この風習は古くから日本は傳はり、十字と書いてムシモチと訓むやうな例も見られるといふ^{*二}。赤ん坊の額にX形のクロスを印する風習は、今も或る地方に遺つてゐるが、これも明らかに咒符として用ひられるものである。島津家の紋も、おそらく、さういつた咒符としての慣用から出てきたものと見てさしつかへないかもしれない。ただ、おもしろいことは、『島津國史』得佛公の條に、十字はすなはち「昇降龍」であるといふ説が見え、こゝで我々はこの紋と龍蛇との關係に當面せしめられる。沼田博士はこれに對してこの結びつきは不可解であるとしてゐるが、これはその中間にスワスチカを置くことによつて説明がつくことのやうに考へられる。といふのは、たぶん昇降龍とは螺旋形スワスチカ——大和五條町の榮山寺格子天井にあるやうな——にはかならないからである。これは、しかし、佛教からの由來

と見るよりもつと古い意味を藏してゐるものと信じてよささうである。

たとへば、唐の則天武氏の時代に卍を用ひて「日」の字に當てたといはれ、支那に於いてもスワスチカは必ずしも佛教徒が用ひたものとは限らず、世界的に流布する幸運の象徴としての意味を有したことは明らかである。この記號は、歐洲はもとより海を越えて遠く新世界にまで傳はつてゐるが、その起原をアリア民族に求める説もあり、マックス・ミュラーその他の學者がこれに従つてゐる^{*二}。これは何よりもまづ太陽祭祀をアリア人によつて説明しようとするところから起つた説であつて、今日ではもはや通用しない。紀元前四世紀中葉の梵語學者パーニニ (Panini) の文典には、なるほどスワスチカといふ文字を用ひた *swastika-karna* の句が見え、これが「耳にスワスチカを印せる」の義であるとすれば、遊牧者のアリア人には家畜の耳にこの印をつける風習があつたことがわかる。しかし、耳につける印がスワスチカと限つたことになかつたことは、同じ文典に *karna* すなはち「耳」の附いたいくつかの成語が示され

であるのもつてしても明らかであるといはれてゐる。すなはち、スワスチカは彼等がインドに侵寇して先住民と接してから後に用ひられたものかもしれないのである。事實、アールリア説を決定的に覆したのでは、スーザ發見の陶器に描かれたみごとなスワチスカで、これは原エラム人の製作に屬するらしく、すくなくとも紀元前を遡ること三千年以上のものであるとせられてゐる。

このスーザの例は孤立してゐるので、前後の聯絡はわからないが、カイザー・ウィルヘルム二世は、「支那の太極圖、その歴史と解説」と題する講演に於いて、中間的な過程として CYTHA (波狀剝形) に注意し、その發祥地はウクライナのキエフ附近であり、謂はゆるトルボルエ文化圏に屬すると論じてゐる。^{*三}しかし、キマもしくは渦卷の模様がトルボルエ文化圏に發祥したか否かは甚だ疑問であり、またこれらの模様が直ちにスワスチカを誘發したと考へることもかなり無理があるやうにおもはれる。

もつとも、エーゲ文明の時代まで降りてくると、かなり豊富な材料をもつて渦紋と

スワスチカとの聯關を辿ることが出来る。ヒッサルリク丘のトロイの古址から發掘せられた陶器その他のものの紋様には、幾本かの渦卷いた腕を有するものがたくさん見られる。動物學者フレデリック・フッセイはこれを目して蛸であるとし、スワスチカを四脚のそれにまたトリスケリオンを三脚のそれに結びつけて考へてゐる。^{*四}それにはたしかに蛸の吸盤としか見ることのできないものが描かれてあり、形から云つてもそれが蛸であることは否定できない。しかも、古代アメリカの象頭神に左旋と右旋との二重のスワスチカに坐したものがあり、そのスワスチカには明確に吸盤が附着してゐる。すなはち、ここにも蛸とスワチカとを結びつける有力な一資料が見られるのである。G・エリオット・スミスは、蛸は母神と同一視せられたものでその賦活力または回復力の象徴がこのスワスチカとして現はされたものであるとし、フッセイの蛸起原説を支持してゐる。^{*五}彼によれば、蛸は、たぶん、コプトスのミン神像よりもつと古い頃、或ひは水壺の慣用化せられた形が定まりつつあつたスマール史の最古代に、かういつた象徴主義の發展に一つの役割を演じたものとせられる。^{*六}

「……ミケーネの渦巻や螺旋に見られる象徴主義が密接に蝟と關聯してゐることは、すこしも疑ふことはできない。事實、ミノアの繪やミケーネの裝飾美術によつて與へられる證據は、生命賦與の一象徴としての渦巻が決定的に蝟から出てゐることを表はしてゐる。エジプトの甲蟲章ネカラフの上や古代トラキアの或る裸形女神像の裝飾のなかに見られる螺旋の使用は、それが生の記號としての渦巻や蝟と同じやうに用ひられたことを示してゐる。舊石器ならびに中石器時代の様式に屬するスペインの洞窟に、L・シレー氏はヒツサルリクで子安貝や帆立貝ともに見出された同様なものの形を、ほとんど正確に表はした燧石具、粗末な偶像、壺などと一緒に、子安貝の貝殻を發見した^{六七}。しかし、文化の金石併用時代の様相がスペインに於いて凋落して、エーゲ人の蝟のモチーフがそこで明白に看取せられたとき、一全體としての文化は、わけてもエジプト人の靈感のまざれもない證據を顯はした。シレー氏はしかるに、新石器時代に於いてすら、粗末な偶像が東地中海の蝟から來た形を現はしてゐる、と主張する。蝟を目して、海洋の、或ひはもつと正確に云へば「肥沃ならしめる水の原理」の慣用的記

號であるとする。彼は、スペインに於ける蝟の金石併用時代的表現のすこぶる興味ある特色を明らかにしてゐる。エーゲ人の渦巻のモチーフは角張つた意匠に取つて代られるのであるが、これはエジプト人が水を表はす慣用の方法の影響に歸せられる、と彼は主張する。この解釋が正しいとすれば（そして舉證の點で心細いにもかゝはらず私はこれを承認したい）、それはリヴァーズ博士が注意した意匠の慣用化に於ける文化接觸の結果に關して^{七八}、一つの瞠目すべき圖解を與へるものと云へる。頂部の角張つて曲つた蝟の腕を表はすこの方法に就いて、たどひいかなる説明がなされようとも、それはスワスチカの起原に關するフッセイの假説に重大な支持を與へるもののやうにおもはれる。なぜなら、スワスチカの脚の渦巻形または螺旋形が、かの慣用の記號に特徴的な角張つた形に變つてくる意味は、これによつて明らかになるからである^{八九}。特に地中海に於いては蝟と母神との關係は密接であり、かうしてスワスチカの起原をその關係から引き出してくるのはおもしろいが、エーゲの島人たちが、その小さな模型を神前に供へたりそれを陶器に描いて裝飾したりすることで母神への崇敬を表は

したものは、單に蝟だけではなかつた。しかも彼等は、それらを様式化して得たものを他の對象にも試みてゐる。たとへば、レイ・ランケスターによれば、小さな魚類、海馬と呼ばれる龍の落し兒、海膽、蝟舟とその浮んだ搖籃、磯巾着、蝶に似た海蛾等は、彼等の藝術家によつて用ひられた對象で、これによつて彼等は海と陸との符合を見出したのである。藝術家の想像した中間的な形で、海馬はほんとうの馬に、海膽は針鼠に、磯巾着は花に、海蛾はほんとうの蝶になつた。これらの藝術家たちは、ささやかな幻想と器用さを働かすことを好んだ。目立つた部分の數や大きさをだんだん縮めることによつて、つまり自然物の形の藝術的圖式化もしくは慣用的單純化に於ける普通の法則によつて、彼等は、三本の腕のある蝟と蝟舟を、渦卷いた一對の角をもつた牡牛の頭に變へたのである。^{*+}このことをもつと突き進めてみると、渦卷およびスワスチカの形式がすでに定まつてゐて、それらを蝟の様式化の際に適用したと見ることが、最も自然ではないかと考へられてくる。ヒッサルリク出土の紡錘環には、スワスチカとともにごく單純化した鹿や鶴の繪が多く記されてゐるが、その鶴を見るとス

ワスチカと酷似してをり、そこから或る人のごときは、スワスチカは聖鳥・鶴の繪を様式化したところから起つたと説いてゐるくらゐである。^{*+}しかし、これも、完成したスワスチカから來てゐるものであつて、決してその逆ではないのである。

とはいへ、我々はここで、蝟の説を否定するにしても、母神との關係までを打ち消すのは困難であることを告げておかななくてはならぬ。トロイの古址から出た鉛の女神像には、器部を蔽ふ大きなV字形の中央にスワスチカが斜めに刻まれてあつて、それが女性の性の象徴であることを示してゐる。またブラジルの或る部族の女たちは、最近まで、*folium vitus* として三角形の蔽ひを下げ、テラコッタ製のその蔽ひの中央に時としてスワスチカのしるしをつけてゐたさうであるが、^{*十二}これも明らかに、女性の性の神聖な記號としてスワスチカと母神とのなんらかの關係を想像せしめると云つてよい。しかし私は、この點でエリオット・スミスなどの説と異つた意見を持してゐる。太陽神が母神からその存在の形式と屬性とを譲り受けてゐることはたしかに認められるとしても、スワスチカの起原そのものまでを母神信仰に歸することができるか否か

は疑問である。母神の一形式としての渦巻の意味は、不可避的に電戟との同一視に導かれた、^{十三}とはエリオット・スミスの説くところであるが、雷電と母神との関係をさういふふう^{十三}に考へてさしつかへないものであらうか。雷電の尊崇はつねに太陽神と關聯してをり、したがつて母系社會の大崩壊といふ事實がその前に横たはつてゐる。かうして母神すらも、多かれ少かれ太陽神への變形を強ひられ、その屬性の或るものを負ふに至つたと見ることが出来る。このことはまた同時に、母神の屬性が太陽神のなかへ性質的に止揚せられたことを示してゐる。そして、この意味で母神と巴紋との關係をあらためて考へることも可能であらう。それは、その熱をもつて物を産む神祕的な機關として太陽神のなかへ持ち込まれ、さらにその意義が擴大されたが、後で觸れるやうにこれがスワスチカに關聯するところがあると云へる。しかし、母神信仰からスワスチカの發生を導くのは、明らかに本末を違へてゐる。私は、古代エーゲ人の間に於ける蝟とスワスチカとの關係は、後に附加せられたものであり、他の民族との文化混淆の結果に違ひなく、蝟はその結果としての地中海的表現であると推定したい。

私はやはり、スワスチカを太陽の記號と見る動かしがたい通説から出發することが最も正しいと考へる。そしてその限りに於いて、太陽神の發生と進化が大きな問題となつてくる。事實、この記號の見られるスーザ出土の古陶器は、エジプトに於ける第一王朝の成立とほぼ時代を等しくし、すでにこの頃から太陽神が西アジアに於いて成立しつゝあつたと見られる。もつとも、メソポタミアやナイル流域の民衆が太陽神崇拜を導き入れたのは、その政治的利用の立場からであつて、太陽の子としての神聖族長を戴く半移動的な民族のやうな純粹の共同體を背景とするものではなかつた。したがつて、宗教的な標章であつたスワスチカも、さういつた本來の象徴的位置に於いては傳はらず、單なる裝飾として模倣せられたのではなからうかとおもはれる。この意味で、スワスチカは古典的ギリシアにも、アッシリア、バビロニアにも傳はらなかつた、とするレイ・ランケスターの説は、^{十四}原則として正しいと云へる。スーザに於ける例もまた、おそらく本來の意義をほとんど失つて用ひられたものであらう。私の想像

では、エジプトやメソポタミアのやうな大流域の平原に農耕を営む星辰崇拝者たちの間にこの標章が傳へられ、早くからクロスの形に單純化せられたものらしい。クロスの星辰起源説がしばしば現はれるのもおそらくかういふところからであらう。

スワスチカを陽石文化の一標章として見ることももし正しいとすれば、まづ太陽神の郷土が問題となつてくる。それは杳として知る由もなく、もちろんここで言及してゐる餘裕もないが、私はただ父を尋ねて日の出の國に行くかのファエトン (Phaeton) の話を象徴的に引いておかう。ファエトンは、父のゐる太陽の殿堂を求めて「日の出の國の真正面に位してゐるインド」(メルフィン)へと旅立つのである。事實「回教徒侵入の時代に至るまで全インドの信仰を集め得た」太陽神の殿堂が燦爛として天に浮ぶ黄金の市府ヒランヤプーラ (Hiranyapura) に建つてゐたといふ。ヒランヤプーラは阿修羅族に屬するヒランヤカシプ (Hiranyakasipu) の首都で、現在のムルタンに當つてゐる。^{十五}エジプトの國王が頭に戴いたかの神聖な巴形の uraeus (蛇形冠章) は、阿修羅の支配者ナーガ・ラジャすなはち蛇王族の首長が戴いた蛇形の王冠の模倣でしかなか

つた。エジプトの太陽神學は、ナイル河口附近にあつて夷狄視せられた蛇崇拝者との接觸を通じて齎あらされたのである。

インドおよびその附近では、スワスチカは、今のところアリアン侵寇以前のものとしては檢出されるに至つてゐない。しかし、J・ファীগッスンなども注意してゐるやうに、龍蛇崇拜とその分布を同じくするこのスワスチカは「ナーガ民族の標章十六」であり、旗の紋章や船のへさきなどにこの印を付けたことは『ラーマヤーナ』その他の古文書を通じてうかがはれる。阿修羅の血を承けた一部族のなから起つた佛教が、スワスチカを標章とし、今日の我々にまで傳へられてゐるといふことは、その固有の傳統を背景にしなくては説明できない。河谷づたひの半移動生活を營んだ本來の阿修羅族は、大流域の中原の民衆のやうな記念碑性を持たなかつたので、すべて金石的遺物を缺いてゐるのであるが、しかもなほ、兩手を交叉して胸に置いた形を swastika - hasta と稱したことがすでに『マハーバーラタ』に見え、また『一切見集』(Sarvadarsa-anasamgraha) にも、兩足を交叉する坐法すなはち交趾を swastika-asana と稱したことが

が記されてゐて、スワスチカの傳統的勢力が生活のなかに傳へられてゐることが、窺知し得られるのである。

しかし、聖視せられた記號がスワスチカだけでなくY字形のものもあつたことは、石窟寺院の刻文などに見られる多くの例によつて明らかである。その意味は今のところ知られてゐないが、刻文の前または後にスワスチカと對應して用ひられてゐるのを見ても、きはめて重要な意義を擔つてゐたらしいことがわかる。^{*十七}「最も古いクロス」(J. F. ヒューキット)とせられる丁字形のタウクロスの原型がこれであることは疑ふべくもない。思ふにそれは、巴の原型をなすトリスケリオンであつて、マヤの聖火の意味もあつたのであらう。この三股からどうして四股に變つたのかは今は知る由もないが、それはおそらく、太陽神學の發達に伴つて起つたものである。あらゆる生産が陰因のみで行はれるとせられてきたことに對する陽因の主張、陰陽交叉の意義のうへに立つた太陽神の勝利を示してゐる。西アジアの古陶器、殊に皿や碗の内側に多く描かれてあるクロスは、時には矢鏃形のしるしをたくさん重ねて流れの方向を指し時には

幾重かの線を束ねて水流を示してゐるのを見てもわかるやうに、明らかに灌漑水の表現であり、また一種の宇宙圖でもあつた。そこでは、二つの極の交叉によつて初めて太陽を中心とするこの世界が生々循環するといふ思想があつたらしく、その交叉するものは同時に蛇であると考へられた。エジプトのプター神がしばしば二匹の交叉する蛇を纏んだ姿で表はされてゐるが、これは有名なヘルメスの神杖に見られるものとともに、明らかにさういつた背景を擔ふものである。クロスはもともと性の神聖な結合を表はす蛇の象徴であるといふ。^{*十九}昇降龍と云はれる島津家の十字紋も、かうして、はしなくも、その背後に朦朧と太古の謎を漾はせながら渦巻いてくるのである。

註一、故沼田博士『日本紋章學』十字の項参照。

二、マックス・ミュラーの説に就いては、『東亞の光』明治四十四年三月號 堀謙徳氏、『東洋哲學』大正二年十月號(大隅爲三氏)等に紹介が見える。スワスチカに關する日本の文献は那波利貞氏「卍字源流攷」(『史林』大正十年十月號)のほか見るべきものがない。

三、龍井邦一氏譯『巴の歴史的研究』参照。

四、Smith, G. Elliot, *The Evolution of the Dragon*, P. 174 に引用のものによる。

五、Smith, G. Elliot, *ibid* P. 174 seq.

六' *ibid.*, P. 176.

- 七' 原註 Siret, L., *Questions de Chronologie et d'Ethnographie Iberiques*, p. 18, Fig. 3.
八' 原註 Rivers, W. H. R., *The History of Melanesian Society*, Vol. II, p. 374.
九' Smith, G. Elliot, *op. cit.*, P. 176—7.
十' Lankester, Sir Ray, *Diversions of a Naturalist*, P. 132—2.
十一' Reinach, Salomon, *Orpheus* (tr. Simmonds, F.) P. 77 et seq.
十二' Hayes, Will, *The Swastika*, P. 30.
十三' Smith, G. Elliot, *op. cit.*, P. 178.
十四' Lankester, Sir Ray, *Secrets of Earth and Sea*, P. 193.
十五' Oldham, C. F., *The Sun and the Serpent*, P. 53—4.
十六' Fergusson, James, *Tree and Serpent Worship*, 1868, P. 246 note.
十七' Fergusson and Burgess, *The Cave Temples of India*, 1830, P. 69.
十八' Budge, E. A. W., *Feish to God in Ancient Egypt*, P. 118, plate.
十九' ハワードの説として藤澤齋彦氏によつて引かれてゐる(平凡社版『大百科事典』第廿三卷一八三頁。)

—

蛇のクロスが、どうしてイエス磔刑の十字架として崇められるに至つたのか。これは、私の信するところでは、人身犠牲の習俗から發したと考へて間違ひないやうにお

もはれる。古代エジプトのオシリス神像は必ず十字を劃した圈内に描かれたが、このことはかなり重要な意味を含んでゐる。といふのは、ある學者によれば、オシリスは實際の王として氾濫したナイル河の水中に投じられたからである。^{*1} 事實、收穫の豊饒を期して最初に犠牲となつたのは、王者自身であつた。その習俗がスメールのそれと一致することは、王者が河水へ投じられた頃の記憶を残したやゝ後代のタンムズ祭の儀禮によつて知られる。その時代の儀禮に於いては、「水に溺れて死ぬ者はもはや神聖な子(王者)ではなかつた。しかし、一人の人間がやはり命を斷たなければならなかつた。これは實に出生と死との悲劇であつた。」とランドンは述べてゐる。^{*2} オシリスの十字は、かうして、自己犠牲によつて制し得た水——すなはち灌溉水の表現として世界に於ける悲劇と榮光との同時發生を語つてゐる。

灌溉とクロスとの關係は聖ジョルジの傳説に最もよく現はれてゐる。すなはち、この聖者の名を負ふ有名なクロスは、彼が龍といふ混沌の水を制壓し得たことを表はす

ものであり、龍の死によつて水が得られたといふ話はきはめて象徴的である。ジョル
ジアに名を與へたこの聖者の名が農耕と結びついてゐることは周知のとほりで、も
も *ge-ourgos* には「鋤」の意味があるのである。

しかるに、ルーヴルにあるエジプトのヘルとセトとの戦ひを表はした圖は、聖ジ
ルジの龍との戦ひと傳承の型が同一であることを示してゐる。といふのは、いづれも
征服者は、武装して馬に乗り、その馬に踏みつけられた龍または鱈の頸に鎗を刺し込
んだ者として表はされてゐるからである。ただ異なつてゐるのは、エジプトの英雄が
鳥の頭をしてゐる點であるが、J・F・ヒューキットはこの鳥の頭にインドへ雨を齎
らす風雲の鳥 (Bindo) の記憶が見られると述べてゐる。^三 この説が正しいかどうかはわ
からないが、さう云へばたしかに、風神ヘルメスの神杖に附いてゐる鳥の翼は別とし
ても、メキシコのバレンクに見出された一つの大きなクロスの上には、聖鳥が棲まつ
てゐる。^四 トルテク族の民族史 (*Tutlacohitl*) に従へば、クロスの崇拜を導き入れたのは
クエトザルコアトル神 (*Quetzalcoatl*) であるといはれ、生命の樹と呼ばれるクロスの

もどにこの神が禮拜せられるのであるが、これは先行者たるマヤ人の雨神クイア・テ
オト *Quia-teot* の祭祀と結びついてゐることは明らかである。メキシコの雨月 *Quia-*
huil にその名を印したこのクイア・テオト神に對して、雨乞ひの犠牲として男や女
の子供が捧げられ、河中に投じられるかはりに酋長によつてその肉體が貪り食はれ
た。カルタゴ人やフェニキア人がパール神に生贄を捧げるための具として鉤十字を用
ひたのは、この記號に灌漑水の記憶を見たからであつた。ナーガの子孫と自稱する北
インドのタッカ族 (*Takkas*) もまた、曾つて、一種のクロス状をなしたユーバ (*Yupa*)
と^五 呼ばれる杙に人間を縛りつけて生贄に供したといふ。

もちろん、かういつた犠牲の祭からは離れてしまつてゐるらしいが、龍を退治した
聖ジョルジと同じく、やはり龍を殺したローマのコンスタンチン帝もまた、クロスと
關係してゐる。彼は、額にクロスをつけ足に龍を記した自分の姿をニコメチアの宮殿
に描かせたが、その貨幣の一つにも征服せられた蛇の上に立つ十字旗^六を示すものがあ
り、メキシコの「バレンク遺址に見出された蛇の上に立つクロスと構想を同じくす

る。」もともとその交叉によつて制壓されたことを意味する龍蛇は、獨立して太陽神の記號となつたクロスとして扱はれるやうになつたのである。かうしてエジプトでは、クロスは、護符、救助する力の象徴として用ひられ、ティフォンその他の惡魔がしばしば綱でもつてクロス狀に繋がれたと傳へられてゐる。外來神ベス像の胸間に時として見受けられるクロスの頸飾りも、さういつた意味で吊されたものであらう。

我々の惠比須神を憶ひ出さずにはゐられぬこのベス神(Bes)の郷土に就いては、ウィドマンのごとくアフリカであるとする者、マックス・ミュラーのごとくアラビアであるとする者等^{*七}いろいろあつて定まらないが、それがNeter-Ta(神國)すなはちアラビアとの關係に於いて語られてきたことをバツヂ博士^{*八}のやうに敢へて否定する必要はなささうにおもはれる。この神がエジプトに入つて來たのは、おそらく、王朝成立のすこし前にバレスチナ附近に到着した^{*九}陽石文化の民族の間からであつて、同じく矮小で脚の曲つたプター神ときはめて密接な關係があると云つてよい。かうして、ベスの

胸像が南バレスチナのガザの銀貨にしばしば表はされてゐるのも、またキプロスで發見せられた或る神像を碩學フレイザーがベスのそれであると推定してゐるのも、決して偶然ではない。ところで、ベスの最古の像の一つといはれるデル・エル・バリー(Der el Bahri)に於ける女王ハトシェプストの神殿の浮彫を見ると、この神はもともとは出産ともなんらかの關係を有したらしく、その點で創造神プターに繋がるところがあつたもののやうである。古代エジプト人は、彫像または塑像を作ると、「開口」と稱してその像の口のところを金屬製の鑿で觸る儀式を行ひ、さうすることでプター神によつてその像に生命が與へられると信じた。これはおそらくドルメンの前面穿孔といふ習俗に通じ、したがつてその背後に巨石構築ならびに金屬器使用を示してゐる。事實、プターは鍛工神であつて、ギリシアのヘフェストスの前身であつた。プターと同じく、『創世紀』のヤベテもまた開くものを意味してゐるが、金屬製作者トバルカイン(『創世紀』四・二三)の裔でいづれも鐵と關係の深いマゴグ、ヤワン、トバル、メセク等は、云ふまでもなくこのヤベテの子であつた(同一〇・二)。口を開くといふ儀禮によつ

て象徴されるすべての生産、創造は、鍛工神の司るところであると信じられたらしく、中央セレベスのトラディア族 (Toradjas) の間には、今でもさういつた信念が遺つてゐる。また、ヴェーダ書のブラーマの創造に於いて我々が見出すものも、これと同一の類型に屬する。

ここで憶ひ出すのはスワスチカと迷宮または迷路との關係であつて、それはA・B・クックの名著『ゼウス』(第一卷)などに詳しく説明されてあるからここには述べないが、中央にスワスチカを有する佛教の謂はゆるナンディヤヴァルタ (nandyavarta) も一種の迷宮であり、『マハーバータ』のなかでスワスチカの宮殿と稱せられてゐるのはおそらくこれであらう。ところで、サー・アーサー・イヴァンズによれば、迷宮 labyrinth とは兩刃斧のリヂア名稱 *labyrinthos* から來た名稱であつて、^{*十二}事實、工匠デダロスが建てたと傳へられるクノッソスの有名な迷宮の遺址には、金屬製のラブリスや柱に彫りつけられたラブリスが到るところに見出される。雷神の標章たるこのラブリス

は、それみづから一種のクロスであつて、レイナックの說に従へば、コンスタンチンの有名な *labarum* (十字旗) の名稱はこれから來てゐる。^{*十三}しかし、ラブリスは、私の想像するところでは鎚の地中海的變形にはかならず、本來は北歐の鍛工神トルの手にある *Mjolnir* のやうないはば鎚十字である。^{ハルネー・クロス}我々の國の打出の小槌もさうであるが、鎚は物を産み且つ創造する力であると信じられた。このことは、*labirinthos* (迷宮) は「出入りする道」を意味する *labra* (または *lavra*) から來てゐるとする説と^{*十四}對照してみると、もつと明白になる。*labra* はたとへば英語の *labrum* (唇) と無關係でなく、*labour* の「分娩する」と「製鍊する」とに同時につながつてゐる。迷宮——といふよりはその原形式たる迷路と、スワスチカとの關係は、或ひは偶然であつたかもしれない。しかし、スワスチカを標章とする採鑛巨石民族と迷路とが深く結びついてゐることは蔽ひがたく、北歐に今もたくさん遺つてゐる迷路を目してクックなどもこれを巨石建造者の仕事であるとしてゐる。^{*十五}ノールエーやスエーデンでは、それは小人ごとも採鑛に關係した巨人の城を意味する *Trolleborg* から發した多くの語によつて知ら

れ、殊にアイスランドでは *Völundarhus* すなはち「ウエルンドの家」と呼ばれてゐる。[※]ウエルンドまたはウイーラントは云ふまでもなく有名な傳說的鍛工であつた。かうして、我々の鍛工神・天目一箇命と親類であるキクロプスの迷宮に就いてストラボン (Strabon) が書いてゐるのは、すこしも偶然ではない。一種の迷路であつたらしい我々の國の謂はゆる藪知らずが鍛冶と關係の淺くない八幡神の境内に存したことも、なかなか興味がある。そして、この八幡神の神紋は、後世に附加せられたものかどうかは解らないが、とにかく巴であることは云ふまでもなからう。

スワスチカまたはクロスを採鑛冶金と直接に結びつけることは困難であるが、太陽祭祀、龍蛇崇拜および巨石構築を伴ひながら採鑛冶金を續けてほとんど全世界にその文化を傳播した民族の標章がそれらであつたことは、ほとんど明白である。この民族の出現によつて人類發生このかた久しい停滞を續けてきた世界史に初めて新鮮な血液が注がれ、この巨大な技術的變革を通じてエジプトの第一王朝が成立し、スメールや

クレタもその前後に同じ過程を辿つてやうやく長夜の眠りから醒めたのである。その採鑛民族は、やがてふたたび西方に向つて立ち去つたが、その時はすでに彼等は、自分たちのうしろに本質的に相容れぬ他の文明の型が成長しつつあることを知らなければならなかつた。それは、きはめて久しい停滞的蓄積を基礎にして大流域の平原に雑居・聚落した星辰崇拜者たちのモニュメンタルな文明であつた。これらの民衆は、彼等の教へた巨石建造をピラミッドの原型たるマスターバに代へ、彼等の教へた太陽祭祀——血の共同體の主體たる神聖族長を日の御子とする——に星學の知識を加へて專制的支配の道具としての重々しい太陽神學を完成した。後者はしかもそのころ青銅を得るに至つたので、前者からの不便このうへもない鐵の補給を必要としなくなつた。さらに、第三王朝のゾセル王のごときは、官廷を河口に近いメンフィスに移すこともに、シナイの銅山を占領してその手中に收めた。かうして壯麗なエジプト文明が花咲くのであるが、西北へ移動して行つた民族の動靜は、採鑛冶金や巨石建造と關係の深い巨人または小人としてかすかに傳へられてゐる。イギリスのコンウォール地方で

は、今でも坑内で小人たちを見掛けるといふ話が傳はつてをり、鑛夫たちはそのため
に坑内ではすべてクロス形をたいへん嫌ふといふ。これは、小人が異教徒として聖十
字を忌避するからでなく、かへつてこれを神聖視するためのタブーであると考へてさ
しつかへない。中央アメリカのナヴァホ・インディアンの間には、「山歌」と稱する儀
禮を示す繪に四柱の神と四本の植物との組み合わせで出來たスワスチカが見られ、その
儀禮の内容によつてそれがどうやら採鑛に關聯するところがあるらしく考へられる。^{*十七}
ナヴァホ・インディアンは採鑛の遺跡を多く有するプエブロ族の一分派なのである。

スワスチカはどこで發生したか。これに對する回答はおのづから陽石文化の發祥地
を語ることであつて、決定的に答へることは今のところ不可能であるが、カイザー・
ウイルヘルム二世が「その起原は、南アジア地方にあるといふのがどうも正しいやう
である」と述べ、またウイル・ヘイズが「それは、佛陀からすつと前の時代に、イン
ドもしくはその附近のどこかアジアの一角に現はれ、そこから世界中に擴がつたもの

のやうにおもはれる」と推定してをり、今のところこれを最も妥當な見解とすべきで
あらう。

とはいへ、この記號が平原灌漑を行ふ者の間に最も深い反響を見出したといふ私の
假説を棄てることができない。それは、たとひ南東アジアから發したものであるとし
ても、阿修羅族の根幹をなす者の間からではなかつた。インダスやガンガの流域に住
む平原農耕民の間にその影響が強くと働いてゐることはたしかであるが、それらの農耕
民のなかにまだ融化しないその民族的根幹は、雑段耕作を續けながら鑛床を追ふて河
谷をおもむろに移動してゐた。その點で、キクロプスのやうに山の下に縛がれたイ
ンドのチャヴァナ(Chavana)の話は興味がある。森のなかで眼を刺して盲ひた彼は、
シャルヤータ(Sharyata)の子たちから土を投げつけられ、そのまま土造の家の柱に
してしまはれる。すると、復讐として彼が彼等の間に不和の種を蒔いたので、シャル
ヤータは彼を宥めるために自分とスー(SuまたはShu)との間に出來た娘を與へた
のである。シャルヤータを生んだサル(Sar)は、灌漑や農耕と關係ある名らしく、ア

ツカド人の間では、「銅の手をもつサラ (Sala)」と呼ばれ、タンムズ神の妻であるとせられた。サルゴンすなはちサルガマ (Sar-ganu) の名や生ひたちは、灌漑と関係し、そこからして歴史的な大王サルゴンがその名を借りるのであるが、おそらくこれは、灌漑を中原の沖積層に應用しはじめたスメール系の民衆に属したものではなかつたかと想像される。しかるに、チャヴァナの父のブリグ (Brigau) は、小アジアへ行つて Phrygia の地にその名を印し、ギリシアではキクロブ族の國の王 Phlegyas となり、またトラキアでは火神 Bruges と呼ばれ、さらに「鋤」を意味する英語の Plough やドイツ語の Pflug の語源になつてゐる。^{*二一}このいはばブリグ民族は、主として砂鐵層を求めながら山間に雑段耕作を営む人たちであつた。スコットランドの北部の山地や島やアイルランドでは、農民たちが藁や燈心草でもつて今もスワスチカの形を編み、これを「收穫の赤ん坊」または「ブライド Bride (もしくは Brigid) の赤ん坊」と稱するさうであるが、^{*二二}農具を供給しつつ農耕を教へたこの民族の消しがたい足跡がそこにかがはれる。このブリグの子孫とサルのを結びつけたのは、前述の話ではス

ーの子孫であつて、それらは洲域の港を足溜りにして八方に遠く往復しつつ交易を営んだらしく、おそらくフェニキア人の祖先たちと後代まで交渉があつたのであらう。サウ王国 (Sau-rashtra) として知られるインド西部のカチャワール (Kathiawar) の部族はその後裔であるが、J・F・ヒューキットは、これと、バンジャブ地方に残存する或る部族とを、合成民族たるヘテ人の系統に屬すると論じてゐる。^{*二二}これをヘテ系と見做すことが正しいかどうかはわからないが、ヘテ人が後代まで製鐵民族と密接な關係を保つたことは事實である。以上は、諸民族の歴史の錯雜した絲のなかからその一端を象徴的に抜き出してみただけであるが、曾つて陽石文化の赫奕たる榮光を擔つた採鑛冶金民族の子孫たちが漸次に零落して他のものの中に吸収せられ、時としてはその勞働者と化し、また時としては鬼として山間に消え去つたことは、キクロブス譚ならびにその一變形とも云ふべきチャヴァナの話を通じてもかすかに推定せられるのである。

この鍛工民族の眞の標章は、スワステカよりもむしろもつと古い巴形の三股であつて、ギリシア人によつてトリスケレスと呼ばれ、特にキクロブ族の郷里であつたりキアの記號として有名であつた。この記號はまた、小アジアから移住したといはれるエトルスカ人によつて用ひられ、遠く北歐までも擴がつていつた。シベリアのミスシンスクから出土した青銅鏡に見られるものも、これであつた。我々の巴も明らかにこのトリスケリオンであつて、三頭巴が本來の巴であることは『鹽尻』の天野信景も述べてゐるとほりである。三はもともと火を象徴する數であつた山崎闇齋『龍雷傳』。支那に於いて檢出せられる最古の巴紋は、いづれも周代のもので、『金石索』(二〇)や『博古圖』(二六)所載の戈・鋌に見える三頭巴がこれであるといはれてゐる。また『西清古鑑』(三七)の鋌・鈕に一頭巴と二頭巴があり、陝西省の鳳翔府から出た同時代の壘に四頭巴が見出される。朝鮮で最古のものとして知られる巴紋は高麗朝の時代に屬し、後には韓の國旗に採り入れられるほどさかんに用ひられたが、これは易の陰陽説と結びついて普及したものであつた。しかし、事實は、『日本紋章學』の著者のやうに、日

本のそれよりも後れてゐるとすることはできないかもしれない。日本の最古の巴として遺つてゐるものは、高野山金剛峯寺所藏の有名な聖衆來迎圖に描かれた大太鼓にあるもので、鐵の關係を多分に有したらしい高野山にそれが見られるのはおそらく偶然ではなささうにおもはれる。また、傳承に残つてゐるものとしては、八幡神としばしば同視せられて神祕的な眩い光焰にお包まれになつてゐられる應神帝は、御腕の上の巴形によつて御諱をホムタ譽田と申し上げる、と傳へられてゐる『譽田八幡緣起』その他のものが最も古いからであらうが、もつともつと古くから我々の國にも巴紋はあつたらしい。俗に巴の字を當ててゐるこのホムタもゑの古稱は、「ほむた」であつた。巴が雷を表象し、蛇體を表はしてゐることは、我々に於いては説くまでもない。巴紋の或るものは、たとへば東京大塚の女高師の正門に見られるやうに、今でもそのなかに蛇の目をはつきりと保存してゐる。

かうして我々は、巴紋文化の源流を溯つてそこに最古代の灌溉耕作者ならびに採鑛

冶金者を見出すのであるが、その主體をなした民族は製鐵術を後代に傳へた者であつて、我々の祖神たちとはきはめて深い關係に立つてゐる。後に黒海南東の古代ポンツスの地に現はれ、さらにダニユープ河を溯つて歐洲人に鐵の知識を初めて傳へたのは、彼等の子孫であるが、その祖先はすでに太古の頃、地中海を横ぎつてシシリーやサルデニアを過ぎ、イベリアに上り、ゴールに入り、ブルターニュに着き、コンウォールやウェールズに寄つて、つひにスカンデナヴィアに達した。そしてそのうちの小人は、そこでも漸次に追ひつめられてラブランドに遁げ込んだと傳へられてゐる。スベイン山中のバスク族の墓碑には極東のものあまり變らない三頭巴ならびに二頭巴が見られるといふから、バスク人の祖先もこれにつながるところがあつたのであらう。このバスク族は、ヒューキットなどによつてしばしばフィン人と同一視せられるものであるが、フィン人にとつては、マレー語で現に鐵を意味する *Desi* に近い *Vaski* は、本來の金屬を意味する名稱であつた。^{※註四}しかるに、森 (*Daso*) の人を意味するバスク族は、一説によれば、インドでは森の泉の創造神ヴァス *Vasu* またはヴァスキ *Vasuki*

の崇拜者であつたのである。^{※註一}

- 註一 Murray, M. A., *Evidence for the Custom of the King in Ancient Egypt*, P. 12.
二 Langdon, S., *Tammuz and Ishtar*, P. 26.
三 Hewitt, J. F., *The Ruling Races of Pre-historic Times*, 1894, P. 10.
四 詳しむは Baring-Gould, S., *Curious Myths of the Middle Ages*, P. 371. 參照。
五 Hewitt, J. F., op. cit., 231.
六 Churchward, A., *The Signs and Symbols of Primordial Man*, P. 370.
七 Budge, E. A. W., *The Gods of Egyptians*, Vol. ii, P. 285 et seq.
八 Mackenzie, D., *Myths of Crete and Pre-Hellenic Europe*, P. xviii.
九 Cook, B. C., *Zeus*, Vol. i, P. 235.
十 Frazer, J. G., *Adonis, Attis, Osiris*, P. 42. note.
十一 Evans, Sir Arthur, *Mycenaean Tree and Pillar Cult and its Mediterranean Relations* (*Journal of Hellenic Studies*, Vol. xxi, P. 105 et seq.).
十二 Reinach, Salomon, *Orpheus* (tr. Simmonds, F.), P. 76.
十三 Burrows, R. M., *The Discoveries in Crete*, P. 120.
十四 Cook, B. C., op. cit., P. 490.
十五 *ibid.*, P. 488.
十六 *ヘアリング・ゴールド* (今泉忠義氏譯)『民俗學の話』二四二頁。
十七 Hayes, W., op. cit., P. 33.
十八、前掲『巴比倫の歴史的研究』六一頁。

- 十九' Heyes, W., op. cit., 15.
二十' Hewitt, J. F., op. cit., pp. 38—9.
廿一' Hayes, W., op. cit., P. 26.
廿二' Hewitt, J. E., op. cit., P. xxvii
廿三、原田淑人氏著『東亞古文化研究』一三七頁。
廿四' Jevon's Schrader, *Prehistoric Antiquities of the Aryan Peoples*, P. 187.
廿五' Hewitt, J. F., *History and Chronology of the Myth-Making Age*, P. xxiii.

追記

『科學知識』昭和十六年四、五月號に右小稿を掲げてから後、高千穂發掘の石器類のなかに、純然たるクロスがあることを知つた。おそらく祭具の一つであつたのであらう。佛教とともに舶載されたものでないといふ私の主張の一端が、これによつて立證されたわけである。

また、秋田縣の上小阿仁村萩形を中心とする北秋田地方では、山間に働くヤマコ（杣・木挽きたち）が、山の神の祭に今なほ鳥居その他に必ずスワスチカの形を描いてこれを神の表徴としてゐるといふ。東北各地の狩獵者（マタギなどと呼ばれる）

がその祖神のことを語る謂はゆる山達由來やまたよりに萬治（或ひは磬治）、萬三郎（磬三郎）の名を云ふのも、明らかに萬字（本當の名は堙滅してわからないが）との所縁を示すものであり、最古代の農具供給者の面影を同じ山間に幽かにとどめてゐるのである。

なほ、シリアのレバノンに於いてクロス（'Id El Saib）發見の祭が毎年九月十四日に行はれることも附け加へておいてよいであらう。小アジアやシリアでは秋の彼岸が新年であり、年の收穫とクロスとは密接に結びついてゐる。

〔Burton and Tyrwhite Drake, *Unexplored Syria*, vol. ii, P. 18.〕

鐵の代古

(譯 翻)



スプーロクキ
(らか畫壁)

鐵

ウィリアム・ゴウランド

次に譯出したのは、イギリスの冶金學者で日本にも來たことのある William Gowland が *Journal of the Royal Anthropological Institute* (Vol. xlii, July-December 1912) に寄せた論稿 "The Metals in Antiquity" (一九一二年ハックタスリ記念講演) のうち鐵關係の部分 (PP. 276—287) である。

或る種の考古學者は、人類に知られた最初の鐵は隕星の齧らしたものでか地の自然のものだと考へてゐるが、これは事實上の證明になんら支持されてゐるわけでない。なるほどグリーンランドのオウイファク (Ovifak) から出てエスキモーが工具や武器の材料にしてゐるのは、地鐵のほんどうの塊である。メキシコのトルカ谿谷 (Toluca) に於ける疑はしい隕鐵も、そこで斧やその他の道具に作られてゐる。

しかし、地鐵が玄歩岩その他のなかに見出された他の二三の土地では、この金屬

は、實際に使用するにはあまりに小さすぎる粒や塊になつて出、しかもこの場合は六十五乃至七十五パーセントの白銅ニッケルを含んでゐるのである。

隕鐵にしても地鐵にしてもそれが稀にしか出ないこと、しかも石または工具によつてほとんどすべての隕石を細工するにいややうな一つ一つになつたものがある筈がないことは、さういふ鐵が古鐵器時代の人間によつて用ひられた材料であつたといふ信條に反してゐる。

そのうへ、鐵のさういつた形式のいづれかがこの金屬の最初の出發であつたにちがひないとする假定は、確乎たる基礎がすこしもないばかりか、總じて不必然ですらある。といふのは、次に記すやうに、鐵鑛は、木や炭の普通の火で金屬の鐵になるくらゐに還元が容易であるからである。

前述したやうなところから、隕鐵にせよ地鐵にせよ、自然鐵は鐵器時代の起原や發展と無縁であり得ると私は思ふのである。

もつとも、隕鐵が製鍊できず、したがつてこれを利用できないと考へることだけ

は、ベック博士の研究に従へば、七〇の隕鐵石（隕鐵鑛）から四八製鍊せられ、七だけが絶対に製鍊できないといふから（Beck, Ludwig, *Geschichte des Eisens*, P. 26）成り立たないことになる。

金屬の鐵の發見は、私見によれば、家庭の火ごか燃えてゐる餘燼などのなかに偶然に埋つてゐた豊富な鐵の鑛片からなされたものである。さもなければ、或る石から金屬の銅をすでに得てゐた原始人がその粗末な熔爐で同じやり方を他の石に試みたとき、その石が鐵鑛で出来てゐたとすればたしかに可鍛鐵の塊が作られた筈で、そこに鐵の發見があつたのであらう。

事實、金屬の鐵は鑛石から還元しやすいので、それが新石器人によつて發見された最初の金屬でなかつたとしたらしごく奇妙である。

冶金學の知識が足りないために、鑛石から鐵を抽出するのは銅を抽出するよりも餘計に知識を要する、また、鐵を製鍊するには銅の際よりも高い熱度を必要とする、と或る種の考古學者が主張したし今も主張してゐる。かういつた説は、實際の冶金學者

によつて次のやうに確定せられた事實と正反對である。

第一、木炭の火で鑛石から可鍛鐵を製するよりも簡単な行程がないこと。

第二、鐵の還元に要する熱度が七百乃至八百熱量カロリーもあればよいのに、銅に要するのは千百熱量カロリーよりも少くないこと。

そのうへ、後述するやうに、鞴も送風装置も要らないのである。

鐵の場合は、銅のやうに鎔解を必要としない。この金屬は、鍛へられる鎔けない塊として得られるもので、道具や武器に作るためには鋸で叩くだけでよい。

冶金學者として著名な故バアシー博士は、その著書『冶金學・鐵と鋼』(Percy, John, *Metallurgy, Iron and Steel*, London, 1864, P. 873) に於いて、この問題に關する冶金學的見解をたいへん巧みに述べてゐる。

「それは、あらゆる冶金行程のうちで最も簡單なものを見做してさしつかへない。」

「かうして、もしも赤鐵鑛または褐鐵鑛の塊を、木炭の火に投じ、その燃料のなかに埋めて、數時間も加熱するとすれば、それは多かれ少かれ完全に還元して、赤熱して

ゐるうちに鐵の棒にたやすく鍛へられるやうになるであらう。」

「鑛石から直接に良質の可鍛鐵を抽出する原始的な方法は、インドやアフリカではまだ實際に行はれてゐるが、青銅を製する際に比して、それは、桁違ひにすつと技巧を要しない。」

鐵の抽出には鎔解が必要であるといふ有力な謬見が今日ですらまだ考古學者の間に明らかに行はれてゐるが、これは、鑄鐵をまづ作つてから特殊な操作によつて可鍛鐵または鋼に變へる近代的方法にもとづいてゐるのである。それによつてのみ鑄鐵の製せられ得る高級の鎔爐や高度の送風装置が持ち込まれた十五世紀から、この方法が始まつてゐるにすぎぬ、といふ事實にもかかはらず、なほこの種の謬見があるのである。

この方法が始まる前は、鐵はすべて鑛石から直接の可鍛鐵として得られ、決して鎔けず、鎔爐の底に堆積するだけで、それを機械的に移さなくてはならぬ、といふことは、常識に屬することである。低度の鎔爐や竈が當時の役に立つ唯一の設備で、その

外に可能な手段とて存しなかつた。この金属の塊は、實際に鎔解せず、鋼の性質から云つて鍛へた或ひは鍛へられ得る鐵の粒から成り立ち、何にでも必要な型にたやすく鍛へられる。

古い鐵の所在地から見出される遺物によつて與へられる證跡は、思ふに、古代のヨーロッパでは、事實、あらゆる國々では、鑛石から鐵を抽出する現實の行程が實際にどこでも同じであつたことを、疑ひもなく立證する。違つてゐるのは、鎔爐や竈の點だけであつた。しかも、この行程は、冶金の全分野のなかでいちばん單純で、鎔爐の穴は地面を掘るかその上を匍はせるかした單純な孔であつた。燃料は木炭で、これを鐵鑛と幾重にも互ひ違ひにして、熔爐のなかに置き、時にはまたその上に重ねた。火は、風だけによつてか、金属の鐵に還元するのに必要な熱度に達するまで吹く鞴によつて、煽がれた。

この金属が鎔解せず、つねに固體の形で得られ、時としては鎔けない可鍛鐵、稀には鋼の性質の海綿狀の塊として得られたことは、繰り返して強調してよい。この點に多くの謬つた概念が存するのである。

精巧な設備や道具は、この操作に要らなかつた。今日ですらセイロンでは、一端で結び合はせた生木の枝で作つた長い火箸で鎔爐から鐵塊を取り出し、それから細い棒で少しばかり打ち叩く。アフリカでは、蔓木の幹を同じ目的に使ひ、鐵塊をそれから石で打つて型に作つてゐる。

前史時代の操作は、アフリカに、また變つた形でインドではデッサン、北西部、その他の地方に、ヨーロッパではスペイン北部のカタロニア地方およびフィンランドに、今もなほ行はれてゐる。日本にまだ残存して使はれてゐる鎔爐は、その單純さ、粗末さ、暫時的性格に於いて他に比を見ない。ヨーロッパ最古の鎔爐でさへ、出土するその痕跡から推定し得るかぎりでは、それよりもつと進んでゐる。それはただ、衝風を導き入れるために底の近くに穴を附けたV字形の普通土槽から成り立つてゐる。鎔爐には、五六時間ほど木炭と鑛石とを互ひ違ひに重ねて詰め込み、脇がよく鎔解して腐蝕狀を呈してから操作を止め、壁を壊して、鋼の部分を含んだ還元鐵の冷た

くなつた塊を挺や棒で取り出すわけである。鋼の断片は分離せられ、それから古日本の有名な刀剣が作られたのである。

新しい鎔爐が元の位置にすぐ築かれ、二十四時間ぐらゐで作業の準備がなされる。前述したところによつても、鍛へ得られる鑛石から製出するのに必要な操作の單純な性格が、はつきり現はれてゐる。

鑄鐵になると、鎔爐は、中世紀まで、程度が低すぎたし、その衝風も製鍊に不足であつたが、鎔爐の熱度が烈しい風が偶然に増大した衝風かによつて異常に高まつたとき、同時にそこに木炭がどつきりあつたとすれば、ごく少しかだけそれが得られたかもしれないことは、あり得ないことではない。しかるに、脆くて何にも役に立つ形に鍛へ込むわけにゆかないし、鎔解點が高くてもそれから再鎔解して鑄造することもできないので、それを利用することはたうてい不可能であつたのである。

それがもし曾つて製せられたとしても、古い頃の見本がまだ發見されないかぎり、次の詰め込みとともに鎔爐に戻つて考察しなくてはならぬ。

インドのガッツ山脈地方の丘陵部族の間にまだ残つてゐる鎔爐の型は、ダニュープ上流地方ならびにヨーロッパのジュラ山脈地方に於ける前史時代の鎔爐と酷似してゐる。それはただ、衝風を入れたり鐵を取り去つたりする底の近くの孔と鑛滓を棄てるためのもう一つの孔のある、直径がほぼ十吋から十五吋ぐらゐ、高さが二呎六吋から四呎ぐらゐの、粘土で出来た筒形のシャフトから成り立つてゐる。前史時代の鎔爐が同じやり方で作られたにちがひないから、私はこれに附け加へて詰め込みの作業のことを簡単に述べておかう。「鎔爐には、まづ木炭を半分ちかく詰め、その上に火を置いてから頂邊までぎつしり木炭を入れる。それから風を送る。爐の頂邊の木炭が沈下すると、鑛石を本式に詰め込むまで鑛石と木炭とを互ひ違ひに詰め込み、それから操作を終へるまで衝風をもつと強くして送り續ける。鑛滓の大部分が爐のなかに残るが、鐵と一緒に取り出される。可鍛鐵の小塊や鑛滓や燃えない木炭を出す爐の前面が取り拂はれると、それで四時間から六時間ぐらゐにわたる詰め込みが完了する。」鐵がそれから棒で鍛へられる。

上部ビルマに於いては、これと同じやうな型の鎔爐が一八六四年にまだ残つてゐたが、これは、作業の際にどんな人工の衝風も用ひなかつたほどで、もつと原始的ですらあつた。作業してゐる間、燃料を燃やすに必要な空気は、操作の後に鐵塊を取り出す穴につけられた土管の一つから入れられる。爐を勢ひのよい風に向ひ合ふやうにして自然の衝風を得るにちやうど具合よい所では、なんら注意が拂はれてないに見えるのである。

*

初期製鐵地方——西アジアには二つの重要な地方があり、そこに曾つて多くの鐵鑛を産し、初期鐵工業の廢址が見出される。

一つは、黒海ユークラシヤの南東にある地區（古代バフラゴニアおよびポンツス）で、今のエシル・イルマツク（Yeshil Irmak）からバツーム（Batun）まで擴がつてをり、海岸からあまり遠くない山脈群の一つを含み、鐵の散布するその低い斜面と麓の丘陵に沿ふて

ゐる。

もう一つは、小アジア南東のタウロス（Taurus）および新タウロス（Anti-Taurus）地方で、アナムール（Anamur）岬からシリアの境界、シリアではアレppo（Aleppo）、ユーフラテス河、およびレバノンまでの西に横たはつてゐる。

右の所在地のいづれかが西アジアで最も早く製鐵を行つたところにちがひないが、古い遺物の範圍と性質から推定して冶金學の見地から云へば、この金屬を本式に産する前者が最初であると信じられる確かな理由がある。

鐵はまた、ニネヴェの遺址に達するチャリ（Tiyari）山脈とクルヂスタンの隣接部分に見出され、現在でも鐵の産地である。チャリ山脈の鑛石はまた、古代アッシリア人によつて最古代に鐵の抽出のために處理せられたが、この鑛石は製鍊が難かしいか、充分に産しないか或ひは金屬として劣つてゐるかであつたのであらう。紀元前八八一年頃には、黒海附近の鐵産地、カリビア（Chalybia）、チベリニ（Tibereni）および古典作家たちのモスキ（Moschi）等の諸地方から、貢物としてアッシリアに齎らさ

れた。

アッシュル・ナシル・パル (Ashur-nasir-pal 紀元前八六〇年乃至八八五年頃在世) がカルケミシ (Charchemish) 附近で鐵を得たとも記録されてゐる。アッシリアの鐵の廣汎な使用を立證するこの記録を支持するものとして、ユルサバード (Khorsabad) に於けるヴィクター・ブレース (Victor Place) の注目すべき発見がある。紀元前七一〇年頃に建てられたサルゴンの王宮の遺址に、彼は、その見積りに従へば十六萬砵より少くない鐵を藏した一つの石造家屋を見出した。鐵の大部分は長さ十二乃至十九吋、太さ二吋四分の三乃至五吋半の鐵の棒である。それらは、いづれも端をぞんざいに叩き延ばし、中央に孔をあけ九乃至四十四ポンドの重さがある。ブレースはそれを或る種の工具であると推測したが、實は人、馬、駱駝などで運搬するのに便利なやうに鐵山の爐でこの形に鍛へた鐵の棒である。

運搬と賣買のために鐵をかういふ單純な形にすることがローマ時代、否、三四十年前までフィンランドやスエーデンに残つてゐたことは、特筆してよい。

右の蒐集品は、主として、軍需用品や建築作業の準備に持つてゐた鐵材の貯藏であつた。けれども、そのなかには、椅子とか馬銜とかいつたやうなすべて日常の需要に供する出來上つた鐵製品もたくさん見られる。

かういふ鐵の夥しい貯藏は、この金屬がサルゴン時代の前に代々長いこと使はれてゐたのであるから、アッシリア人が紀元前一五〇〇乃至二〇〇〇年よりも早くから確實に鐵を知つてゐたと主張するのは理由ないことでない、といふことを疑ひもなく指示する。

レイヤード (Layard, A. H.) はまた、よく知られてゐるやうに、ニネヴェ遺址の發掘の際に、多くの武器、劍、短劍、槍先、矢鏃、鐵製工具などを見出した。

遠い時代に冶鐵の行はれた北アジアの他の地方は次のとほりである。――

北ベルシア、ケルマン (Kerman) とシラス (Shiras) との間、ベルセポリスから遠くない、バルバ (Parpa) 附近には、古い頃の鐵製作を示す資料がたくさん残つてをり、この古代都市の附近の平原に見出された夥しい量の鐵製器具の産地がそこであつ

たことは疑ひない。

また、北ベルシアのカラ岳 (Kara-dagh) 地方には、莫大な量にのぼる前史時代の鐵滓の塚が見出される。

なほ、附け加へておくが、ニネヴェはこれらの諸地方からもいくらか鐵を得たのである。

インドでは、鐵鑛は、やや廣く分布し、太古すでに、主として北西地方、中央インド、西ガッツ、ミゾール、マドラス、ハイデラバード、クッチその他で製せられた。

南インドではすくなくとも紀元前二十世紀頃から鐵が抽出されてゐたことはほとんど確實であり、『リグ・ヴェーダ』に武器として用ひられたことが記載されてゐることいふから、パンジャブ地方ではそれよりもつと古く始まつてゐる。

エジプト、西アジア、ヨーロッパのごとき世界の他の所では、銅器または青銅器時代が一般に鐵器時代に先行してゐるが、南インドに於いても果してさうであつたか否かはまだ證明されてゐない。青銅、黄銅、銅の器具や裝飾は實際にごく少数しか見出

されないが、それが鐵器時代に先行したことを明示し得る資料はまだ一つも現はれないのである。

プリニウス (Pliny) に従へば、最上の鐵はセリカ (Serica) のゆれであつたが、この名稱によつて示される國はまだ判明するに至らない。それが支那であつたとするのはたいへん疑はしく、むしろセリカ鋼の産地として「中央アジア、ウズベクの」フェルガナ (Ferghana) 山岳地方 (コーカンド) に注目しなくてはならぬ (Beck, op. cit., p. 255)。支那の記録に、和闐 (新疆省内) の一王子が疑ひもなく鋼を意味する「青銅」の硯箱を王の一人に贈つたことが見えてゐる。鐵鑛は、支那、主としてその西部地方に普通に産するが、どのくらゐ前から金屬として製せられたかを示す具體的な證左はない。鐵の最初の使用の時代に就いて古文献によつて與へられる證明もまた、しごく疑はしい性質を持つてゐる。紀元前二〇〇〇年頃に在世した周王の條に、鐵のことがなるほど記載されてゐるが、これは例外であつて、紀元前約一〇〇〇年よりも古い著作に鐵に觸れたものはないのである。

とはいへ、磁石の羅針盤は、紀元前一〇〇〇年よりもずっと早い頃に支那人によつて發明せられたといはれ、果して然りとすれば當時すでに鋼を知つてゐたにちがひない。

日本人は、大陸から移住したとき、青銅時代の文化段階を過ぎて鐵器時代に入りつたので、青銅器時代の武器としてはわづかに薙刀と一口か二口の劍とが見られるくらいのもので、しかもそれらは彼等が最初に占據した島(九州)に見出されるだけである。彼等は、紀元前三、四世紀、ドルメン建造者となる前に、すでに鐵の巧みな工人であつた。ドルメンの玄室に見出される武器は、鐵の刀、槍先、鏃の外になく、しかもそのすべては、わけても刀劍は、鍛工術のすばらしい模範である。

*

鐵を人類が初めて用ひた時代に就いて多く論争せられた問題は、有効な證明の許す範圍内で我々の考察を要する。證明がごく不完全であるばかりでなく、不幸なことに

それがあまりにしばしば誤解せられがちな文献學に特に基礎づけられてゐることを、この關係に於いて指摘する必要はほとんどない。ここからしてこの問題は、今のところ決定的な答を許さないのである。けれども、さういつた證明にもとづいた次の表の年代は、それぞれにその年代を背負ふ發見物と事件とによつて多少の權威をもつて進められてきてゐる。

表

史前のエジプト	鐵の珠數玉
第四王朝 紀元前三七三三年	ギゼー (Gizeh)、大ピラミッドの内部の接ぎ目のなかの鐵片。
第五王朝 同 三五六六年	アブシル (Abusir)、鶴嘴の數片。
第十二王朝 同 二四六六年	ヌビア (Nubia)、槍の穂先。
同 同 約二三五七年	古代支那史の現在の研究 (Brough) に従へば、支那に於ける鐵の使用。

第十八王朝 同 二〇〇〇年 (ヒツサルリク Hisarlik)、第二都市の鐵片。

同 同 一六〇〇年乃至一四〇〇年 カルナック (Karnak)、鎌。

同 同 一四〇〇年乃至一三〇〇年 アケーア人がギリシアに入つたが、Ridgeway

に従へばこれが鐵劍を持つてゐた。

同 同 一二〇〇年 青銅時代がクレタに於いて鐵器時代のなかに薄れる。

同 同 一一〇〇年 エトルリア、鐵の使用 (Montelius)。

同 同 一〇〇〇年 ホメロス時代のギリシア、鐵器時代。

同 同 同八八五年乃至八六〇年 アシュル・ナシル・バル、カルケミシから鐵を齎
らす。

同 同 八八一年 アッシリア、モスキの貢納表。

同 同 八〇〇年 ダマスクス壞滅に五千タレントの鐵が取り出された。

同 同 八〇〇年 中央ヨーロッパに於ける鐵劍 (Montelius)。

同 同 八〇〇年 イギリスの鐵器時代。

同 同 七〇〇年 サルゴン王宮に於ける夥しい鐵製器具と買賣用鐵棒。

同 同 七〇〇年 鐵の武器 (ハルスタット)。

右の表を一覽するとき、年代をめぐつて多くの融和しがたい説の對立がこれを著しく特色づけるであらう。冶金學の見地から云へば、年代の歸屬のさまざまは、説明しがたいばかりでなく、たいへん疑はしく見える。

正確に近いものとしてエジプトの資料に與へられた年代を容認して、そこから上記の鐵に関する二三の斷片を掲げたのである。

ピラミッドの資料はフライト (Flight) の調査によつて非金屬であると斷定せられ、そのうへそれは化合炭素を含んでをり、それと、すでに明記した別の理由とで、地鐵ではあり得ぬもののやうである。それが、シナイ半島から來、銅を鎔かす際に偶然の處理によつて得られ、その時からそこで引き續いて製鐵が行はれた、とするのはあり得ぬことでないとおもはれる。

やや時代が下つても、古い鐵滓から理由づけることすれば、エジプトは疑ひもなくそ

の地方から若干の鐵を得たのである。

鐵製の器具や武具で、わりあひ後世に屬するものがエジプトに稀にしか出ないのは、その國とアッシリアとの交通といふ見解では説明しがたい。アッシリアがこの金屬を確實に用ひたのは、紀元前約千五百年ぐらゐのものである。けれども、金屬なしに完成したとは信じられぬエジプトの宏大な工事を考へると、青銅の工具がまづ豫想されるにちがひないが、それがさう數多く見出されないといふことはよく記憶すべきである。エジプト人が特に老練であつた石の工事に就いて云つても、その目的に適する工具はごく少數しか見出されない。これらの事實は、石製工具を使用したか、さもなければ或る時代に鐵製工具を發見したことを、どうしても我々に信じさせる。

アフリカでは、冶金學的證明が助けしてくれるかぎり、鐵鑛からの鐵の抽出が悠久の昔に行はれた。滓や腐蝕したものの堆積に跡を遺してゐる古代鐵工業の所在地は、この大陸に廣く分布してゐるので、それは非常に早い頃に始まつたにちがひなく、しかもベツクに従へばそれは土着のものであつた。この古代アフリカの鐵製鍊は、エジブ

トに知られた。

最古の時代には、鑛は用ひられなかつたし、その必要もなかつた。たとへば、ラゴス (Lagos (西アフリカ・ニジェリア地方)) から百六十哩ほど離れたオラ・イグビ (Ola-igbi) では、熔爐が今もあつて現に作業しつつあるが、そこでは、人工の衝風が用ひられず、空氣を通しただけの風が要求されてゐる。

これらの事實から云へば、ヌビアに見出された第十二王朝の鎌がアフリカの製鐵遺址の一もしくは他にその起原を持つことは、ほとんど事實に近い結果になるかもしれない。

アッシリアでは、すでに指摘したやうに、鐵器時代は最古の昔から始まつてゐる。

モスキからの貢納の記録とコルサバードで發見せられたこの金屬の夥しい量とは、私見によれば、紀元前一五〇〇年よりも決して後くないその古さを指示する。

黒海ユラシヤの南東に就いて云へば、古代ポンツスの鐵産地方の到るところに廣く散らばる前史時代の鐵滓の堆積が、もつと早い頃にすら鐵が鐵鑛から抽出されたことを示すの

に役立つてゐる。

インドでは、『リグ・ヴェーダ』の記載を受け容れるならば、紀元前一五〇〇年ごろにパンジャブで鐵が用ひられた。さらに、鐵の槍先と物品とが、ヒンヅー教徒流入以前のデツカンの古墳と墓塚とに見られる。また、紀元前一五〇〇年のものと推定せられるインダス附近のインド人の墓にも、鐵製品が見出されてゐる(ヘック)。

ヨーロッパになると、鐵器時代の開始を決定する點で重大な困難に我々は逢會する。冶金學はオーストリア・チロルのアイゼネルツ地方とイタリアのエルバ地方とを指すのであるが、そのいづれにも紀元前一〇〇〇年よりも古く、進んだ青銅器時代の文化があつた。

純粹に冶金學的の見地から見れば、前者の地方、すなはちドラヴェ(Draue)、サヴェ(Save)、ムル(Mur)、エンス(Enns)等の、ダニューヴ支流の上流をめぐる國(古代ノリクム)のほうが早かつたと云へる。

アイゼネルツ(Eisenerz)の多くの遺址には、容易に還元される鐵礦の大堆積があ

つ、全山が鐵の炭酸塩と酸化物との一つの塊になつてゐる。丘腹や川床に鐵塊が豊富にあつたのであるから、家庭の竈の中を圍む石として用ひられなかつた筈がなく、すでに指摘したやうに、偶然に火中に埋まりでもするとしたら可鍛鐵が出来たにちがひない。最も還元のとやすい褐鐵礦は、到るところ地面に産し、址代の鐵工業者によつて扱はれた唯一のものであつて、他はみな棄てられて今も荒れ崩れた塊に見出されるからで、發掘の必要はなかつたのである。

もつとも、考址學の見地から見れば、これは變則であつて研究を要する。

アケーアがもしも鐵の時代にあつたとすれば、ギリシアに入つて(紀元前一四〇〇年乃至一三〇〇年)、ノリクムから鐵を、或ひはグラシナツツ(Glasinatz)附近から鐵礦を得たとき、グラシナツツと同じ文化に屬したハルスタット民族の鐵の武器には、紀元前七〇〇年よりも早い年代が附せられるやうにおもはれる。ハルスタットは、史前ノリクムの製鐵遺址から容易に達し得るところにあるのである。

エルバ地方では、紀元前一〇〇〇年ほどの、モンテリウスの謂はゆる前エトルスカ

時代に、青銅の柄のついた鐵劍が普通である。鐵劍のやうな進んだ武器から見れば、それより數世紀も早くから鐵が使用せられたと主張してよいかもしれない。しかし、青銅器時代の人間がすでに金屬の工作にたいへん巧みになつてゐたことを憶ひ起すなら、この主張は支持せられないであらう。彼等が鑛石から鐵を得たとき、それを武器、殊に劍を作るには、銅や青銅で作るよりも難かしくなかつたにちがひないからである。ここからして、鐵の最初の發見からその一般的使用までは、時の長い間隔がないと云へるのである。

フリクムとエルバ島との二つの地方に關していま述べたところから云へば、ヨーロッパに於ける鑛石からの鐵の最初の抽出をどちらと確定的に歸し得ないうちは、さらに研究を要することは明らかであらう。

また、アジアとヨーロッパとは、思ふに、銅の場合と同じく、ヨーロッパに知られる前に鐵がアジアで用ひられたことは疑ふべくもない。

トラキアは古い頃に鐵を製した所のやうに推定されてゐるが、しかし冶金學的證明はない。トラキアの劍はなるほどホメロス時代に有名であつたが、たとひ劍はトラキアで製せられたにしても、それを鍛へた鐵がそこで得られたことにはならない。といふのは、中世時代の有名なダマスクスの刀身に要した金屬は、ダマスクスでは製せられないで、ハイデラバード(南インド)のニルマ(Nirma)附近にあるコナ・サムンドルム(Kona Samundrum)で製せられたからである (Schwarz "Stahl und Eisen," vol. xxi. pp. 209—399)。シェッフィールド(Sheffield)の鋼もスエーデンの鐵で製せられたとは限らないのである。

附

錄

フィリッピンの地名に就いて

過去および現在の数多い土着語に通曉することなく地名を類推するのは、云ふまでもなくたいへん危険なことである。たとへば、サマ語類で擧げて、**サバング**(Sabangan)は落合の義、**サタン**(Sa-tan)はSa(一つ)のBatan(ヌタン島)を意味するといふ。しかしPisang(甘蔗)などを除外すれば、Sabangan(落合)にもPasir(沙、淺瀬)にも本来はやはり砂鐵との所縁があつたもののやうにおもはれる。つまり、舊約の謂はゆるDesor(雨降れば流れる小川、澗谷)、フランス語のsable(砂)、英語のbasin(池、小さな灣)等とそれらは通じてゐるのであらう。

この點、誤謬は致し方ないとして、とにかくSBおよびBS語類の地名を参考のため擧げておく。地形の變動を蒙つたいくらかの例外を除けば、おそらく以下の地名の周邊に砂鐵層があることを私は確信する。

まづ南から云ふと、スル州では、いちばん大きなホロ島にさういつた地名が一つもなく、タキタキ島附近に甚だ多い。南端にシブツ海峡を隔て、すぐシブツ島(Sibutu)がある。タキタキ島にはバス山(Bas)、シバンカト山(Sibankat)があり、タキタキ灣にバシフリ暗礁(Basifuli)、島北にバスバス島(Basbas)、バスン・ダクラ島(Basun

Dakula) があり、後者と本島との間をバスン海峡と呼んでゐる。なほ、バスン・ダクラを含む諸島をタターン (Tataan) と呼ぶが、これはおそらく、北ボルネオ・センバコン河上流のタタルやラブ河上流のトントールと對ひ合つて、製鐵鑛のタタラとなんらかの關係があつたものと考へられる。このタータンの名稱は、そこから遠くないバシラン島の南のタタラン島 (Tatalan) につながり、さらにモロ灣を隔ててミンダナオ・ラナオ州のタタリカン (Tatarican)、その南方コタバト州のタタヤン島 (Tatayan) に結びついてゐる。

タキタキ群とタプル群との間にシボエ海峡 (Sigboe) があり、タプル群のシアシ島の南端がバスバス岬 (Basbas)、北端がシバチャン岬 (Sibatyan) と呼ばれ、島のすぐ東にシビヒンガ島 (Sibihinga) がある。

その北東のサマレス群を隔て、タタラン島の北にバシラン島 (Basilan) があり、その西側にマラマウル島 (Malamaul)、シバケル島 (Sibakel) がある。

バシラン海峡を渡ると大島ミンダナオであるが、その間にマラニバ諸島 (Malanipa)、シベコ島 (Sibago) があり、すぐ對岸にブサイ (Busay) がある。對岸のサンボアンガ半島西岸には、マラヤル (Malayal)、シブコ (Sibuco)、シブガハ岬 (Sibugan)、サバリク岬 (Sahalic) 等が見えるが、その邊からミンダナオ海の長い海岸線に關係地名がほとんど一つも見出されないのは注目してよい。對岸のボホール島にも北岸を除けば一つもなく、中間のバンガラオ島、シキホル島、カミギン島にもないのである。

サンボアンガ半島の右岸は、シブゲイ灣 (Sibuguey) で、中にブサン灣 (Busan) を抱き、南東端にオルタンガ島のセボト岬 (Sebot) を擁してゐる。なほ、オルタンガの島蔭にシブラン島 (Sibulan) があり、その北東のヅマンキラス灣にマランガス (Malangas) がある。

そこからしばらく見當らないが、ラナオ州の南に至つてシブアン河 (Sibuan)、マラバン (Malabang) および前述のタタリカンがある。コタバト州ではバサク (Basak)、バシヤワン灣 (Basiauan)、南部にセブ湖 (Sebu)、その湖畔にバサ山 (Basa)、マリバ

ト山 (Malibato) があり、その東方にサプ灣 (Sapu) がある。

ダビオ灣には、シブラン河 (Sibulan)、『マララタ (Malalag)』、『マリタ (Malita)』、『カリアン岬 (Calian)』があり、サマル島北端のバサ岬 (Bassa) がある。また、東岸の山奥に入ると、アグサン河の河源にサバキ (Sabaki) がある。聖オウガスチン岬の突端を廻ると、州東岸にプサン岬 (Pusan) とそのすぐ北にカラガ (Caraga) がある。

スリガオ州ではビスリグ灣のビスリグ (Bislig)、『カレト (Caleto)』、『北部のシバハイ (Sibahay)』があり、海上のブカス島にシボンガ港 (Sibongga)、『シアルガオ島北端にスフハン岬 (Sugbuhán)』、『サパオ (Sapao)』、『デナガット島南端および南西岸にシブカワン (Sibucawan)』、『シバンノック (Sibanoc)』、『シバレ (Sibale)』等の諸島がある。

アグサン州では、アグサン河中流にバサ (Basa) があり、さらにサブド (Sabud)、『シバガト (Sibagat)』等の支流がある。

中央のブキドノン州にはまたマルロ (Maluko)、『マライバライ (Malaybalay)』、『マラマツ (Maramag)』等があるがアグサン州北半、東ミサミス州全部、ラナオ州北半、西

ミサミス州全部、サンボアンガ州北半をつらねる地帯にはほとんど一つも見出せない。

レイテ州では、レイテ島南部のソコド灣にスバン河 (Subang) が注ぎ、北東岸にサベン (Sabang)、『北端にカリガラ灣 (Carigara)』、『ブサイ山 (Busay)』、『カルブラン (Calublan)』があり、その對岸のビリラン島北端にサベン岬 (Saban) がある。

サマル州では、サマル島の東邊にシバイ島 (Sibay) があるからるで、他にサベン (Sabang)、『マラガ (Malaga)——スペインのマラガか?』、『サバリスト岬 (Sabaristo)』、『カルバヤツ (Calbayag)』、『カルビガ (Calbiga)』、『バサイ (Basay)』等がいづれも西岸にあり、さらにその海上にバシアオ群島 (Basiao) がある。また、ブランカ河支流にソボル河 (Sobol) がある。

サマル海を隔ててマスベート州には、南東にバスライ島 (Baslay)、『北端にブシン島 (Busin)』があり、對岸のブリアス島南端にブサインガ島 (Busainga) 等がある。

マヌベートとミンドロの間のロンブロン地方には**シブヤン島** (Sibuyan) があり、隣のロンブロン島南端に**サブライヤン** (Sablayan) がある。

マリニンヅク地方では、マリニンヅク島南端に**スバン岬** (Suban) があるだけ。タブラス海峡を隔てたミンドロ州にもわりあひ少いが、それでもミンドロ島の北東岸に**カラパン** (Calapan)、南東岸に**スバーン** (Subang)、ナウハン湖畔に**スバーン** (Suban)、北岸に**サバーン** (Sabang)、西岸に**サブライヤン** (Sablayan)、北西端に**カラビデ岬** (Calavite) がある。

ミンドロからアボ海峡を渡るとバラワン州で、すぐ**アスアング島** (Busuanga)、**カラミアン島** (Calamian)、**セビク島** (Sebik)、**サビノ礁** (Sabino) が、西クヨ水道を隔てゝはるか東方海上の**マラカンド島** (Maracando)、**マララビス島** (Mararabis) 等を望んでゐる。なほ、バラワン島の**マルンパヤ** (Malumpaya)、**シバルタン** (Sibaltan)、**カラマイ** (Caramay) 等の外に、**ブッシュ島** (Bush)、**ブッシュ嶼** (Bush)、**ベシエ島** (Bessie)、**バシエ島** (Basie)、**ビスカイ島** (Bisucay) 等がある。

バナイ島では、カピス州にかなり集中し、北端に**スバイ岬** (Subai) のある**カラバオ島** (Carabao) の南西に**シバトン** (Sibaton)、**シボロン** (Sibolon)、**カルヤ** (Caluya)、**シバイ** (Sibay) 等の諸島が相接し、本島の北西端の**サボンコゲン岬** (Saboncogen)、**サバン** (Sabang) と對してゐる。そこから南東へ降りてくると、**ブスアム** (Busuang)、**カリボ** (Kalibo)、**サピアン** (Sapian)、**シバラ山** (Sibala) がある。

北岸のアンチク州には、**マラリン島** (Maralison)、**シビロム河流域のシバロム** (Sibalom) 等かあるくらは、南東岸のイロイロ州にも同名の**シバロム河** (Sibalom)、**ギマラス島のシブノク河** (Sibunoc) があるだけで、やはり関係の稀薄なネグロス島西州と對してゐる。ただ、北東端、すなはちカピス州からビサヤ海を通つて一方はサマレス海に入り他方はセブ島に赴く線の途上に、**カラニヤン島** (Calagnan) と**シンプル** (Simpul) 夫婦島 (Sibulucac—ヤガントス諸島のこと) がある。

ネグロス西州には、東岸に**カラトラヴァ** (Calatrava)、南西岸に**マラパンタオ山** (Majapantao)、**シパライ** (Sipalay)、**カリパバ** (Calipapa) があり、東州には北部に**バサク**

(Basak)、南部に**シブラン**(Sibulan)、**シブド**河(Sibud)、**バサイ**(Basay)がある。

セブ州に入ると、北端に**カルナサ島**(Carnasa)、**マラパスクワ島**(Malapaskua)、**ランガマン島**(Calangaran)、セブ島西岸に**ブスワン**(Buswang)、**スバ**(Suba)、**マラブヨク**(Malabuyoc)、南端に**バサク**(Basak)、東岸に**シボンガ**(Sibonga)、**セブ**(Cebu)——本来は **Subu**)がある。セブと向ひ合つてゐるマクタン島の北端が**バスバス岬**(Basbas)と呼ばれる。なほ、セブとシボンガの中間にある**ナーガ**(Naga)は、南カマリネス州の同名の町と同じく、蛇神ナーガ華やかな頃の空しい落葉の一つであらう。

ボホール州では、ボホール島北西岸に**バサーン**(Basan)、**カラペ**(Calape)、東岸**ラビニン島**との間に**バシアオ海峡**(Basiao)がある。

ルソン島に入ると、ラモン灣とタヤバス灣との間のくびれた地峡の東にある南東の半島一帯と、マニラ灣附近から島の中央を通つてポントク西方に至る一帯とに、関係

地名が多く見される。

半島の南東端にある**ルソンゴン州**には、南端に**マルノク**(Malnog)、**ンヤンゴン灣**に**サブラヤン島**(Sablayan)、北西岸に**シバゴ**(Sibago)がある。

アルバイ州には、ボロロ河と合流してドンソル河に入る**バスタク河**(Basag)、アルバイ灣に注ぐ**フサイ河**(Busay)、その分流**サバン河**(Sabang)、西岸**バンガニラン灣**の北に**ビスカオ灣**(Biscoa)があり、ラゴノイ海峡を隔てたカタンデュアネス島にはまた、南岸に**カロールボン**(Calolbon)、東岸に**ソボク灣**(Soboc)、北端に**サバソン岬**(Sabason)がある。

南カマリネス州では、東部に、南東角を**サバソン岬**(Sabason)と呼ぶ**島バソト**(Basot)、**シバウヤン島**(Sibauyan)があり、ナーガ附近の中央部に**カラバンガ**(Calabanga)、**サボーン島**(Saboon)、**パスカオ**(Pasacao)、**シボノ岬**(Sibono)、**フサク**(Busak)、**シボコト**(Sipocot)等がある。

北カマリネス州には、**バスド**(Basud)、**ブソドブソド河**(Busodbusod)、**ユムトノ河**

(Bisigon)、『**バシアド**灣 (Basiad)』海上に**カラガ島** (Calagua) 等がある。

タヤバス州のきはめて細長い地域にわたつて、南部ポントク半島南西に**スファンギン岬** (Subunguin)、『**西岸にバサン岬** (Basan)』、タヤバス灣内ラギノマク灣の**バシアオ岬** (Basiao)、『**アラバト島のサバン** (Saban)』、ボリロ島南岸にあつてタタウビン岬に近い**ビスリアン・マラキ** (Bislian Malagui)——マラキは後世「大」の意味になつた)、**ヴィナス河口のシバルン島** (Sibalan)、『**北方カシグラン灣のブソクブソク** (Busok-Busok) 等が數へられるが、北部は殊に稀薄であり、皆無の新ビスカヤ州、イサベラ州と續いてゐる。

カガヤン州にも、カガヤン河口の**ビスグ運河** (Bisagu) があるだけであるが、海上を北へ進むと、『**ズブヤン諸島にカラヤン島** (Calayan) がある。その北の**サフタン島** (Sabtan) は「一つのミタン」の意味だとされてゐるが、果して然るか否かは疑はしく、島内に**サビツタ** (Sabidug) がある。さらにその北には、臺灣との間に有名な**バシ一海峡** (Bashi) がある。

さて本島に歸つて、北端西部の北イロコス州には、**西岸にパスキン** (Pasuquin)、『南

イロコス州にツグデンからポントクへの途上に**ベサン關** (Besang) があるだけ。その東のアブラ州、南のラ・ユニオン州には皆無。

島の北端から中央部まで走る長い山岳地方には、**カリンガ縣** (Kalinga) の南の**ポントク縣にバサオ** (Basao)、『**サバングン** (Sabangan) があり、さらにその南の**バギオ附近にブソル** (Busol) の森林區と**サブラン** (Sablan) がある。リンガエン灣を抱く**パンガシナン州**には、西部**アグノ河**に注ぐ**ソボル河** (Sobor)、『灣の東にある**カルマイ河** (Calmay)』、その分流**バシナ河** (Basina)、『州中央の**マラシキ** (Malasiqui) 等がある。新エキハ州には、州境近くに**サビト** (Sabit)、『**スブル** (Subul) があるが、西隣のタルラク州には皆無、西岸のサンバレス州には**スピク灣のスピク** (Subic) があるだけ、さらにその南の**バターン州**には皆無である。

バンバンガ州のカルンピト (Calumpit) の近くに、**ブラカン州のマロロス** (Malolos)、『**フストス** (Bustos) があり、そのすつと北東に**ビスアル山** (Bisul)、『**温泉で有名なシブル** (Sibul) がある。

リサル州では、マニラの近くに**マラボン** (Malabon)、**パシグ** (Pasig)、州の中部に**ボソボソ** (Bosoboso——曾つてここに製鐵所があつた) がある。

カヴィテ州には、**カルンパン** (Calungpang)、**カランバ** (Calamba)、**カルモナ岬** (Carmona) があり、ミンドロ島と對ひ合つたバタンガス州には、南西端に**カラタガン** (Calatagan)、**ビラヤン灣にカラカ** (Calaca)、**タール湖畔にスピク** (Subic)、南東に**マラブリゴ岬** (Malabrigo) 等がある。

以上で、Bas—Bes—Bis—Bos—Bus など、Sab—Seb—Sib—Sob—Sub を中心としてこれに Kal を Mal だけをそれもあまり詳しくなく附加して掲げたものであるが、これほど稠密に關係地名の見出される所は、日本やボルネオを除けば、世界のほとんどどこにも無い。以上に挙げたものうちには他の意味がはつきりしてゐるものも含まれてゐるにちがひないが、それにしてもこの夥しい類同地名の存在を何によつて説明したらよいであらうか。

冗雑を厭はずにこれを右に列記したのはフィリッピンの人類學、民族學の將來のためになんらかの示唆を投じ得るかもしれないと考へたからである。

後記

私は一介の文藝批評家にすぎない。その私が「柄にもない」研究——と云ふほどのものでもないが——に耽つてきたのは、自己の立場とする文明または民族の理論の基礎が、在來の人の説では支持できなくなつたからである。したがつて、學問的に充分の基礎づけをすることに缺けてゐるし、また初めからそれを望みもしなかつた。だいたい、日本の學問はまだ、西アジアはもとよりインドにさへ手が着いてゐないのである。さういふとき、學問的に最も恵まれない條件のもとで私などがかういふテーマと取り組むのは無暴に近いが、日本にインド學が進み、アッシリア學やヘテ學が興り、エジプト學が盛んになつてから、などどのんびりしてゐられるであらうか。科學を科學たらしめるのは、むしろミュトスであり構想力である。時としては悲願ですらあ

る。今、私も、ささやかな一石を投じて新しい東方の建設のために西方學の物興をひそかに念じたい。

○
本書は鐵の古代史ではない。さういふ知識を欲する人のために、Ludwig Beck の *Geschichte des Eisens* (全五卷) がある。せめて第一卷(古代)だけでも譯出されればよいとおもふ。しかし、ベックもやはり舊い見解に囚はれてゐる。私が追究したのは、ベックの資料よりも古いところである。

日本の文献はほとんど皆無で、徳川時代に書かれた『鍛冶原始考』(小川美啓著)、『鐵山秘書』(下原重仲著)、『金屋子縁起抄』(石田春律著)、『本朝鍛冶考』(鎌田魚妙著)等がいくらか参考になる程度である。慶長二十年に鎌倉鍛冶の岡崎氏に傳はつたといふ『鍛冶傳來縁起』(寫本)もあるさうであるが、私は見てゐない。

○
本書引用の文献はすべて註に示しておいたが、ただギリシア、ローマ等の古典的著

述だけは、孫引きもあつたりして都合で省略した。

○

「民族形成と鐵の文明」の大半は、日刊『大民』に曾つて註なしで連載したものである。『巴紋源流考』は『科學知識』所載、「古代の鐵」は新しく翻譯した。

○

私は、讀者が自主的に郷里なり居住地なりの地名などに就いて調べてみられることを希望する。

たとへば、相模の馬入（相模）川流域で云へば、この川に名を與へた川口の「馬入」（平塚町内）はもともと眞丹生で、對岸の茅ヶ崎に「赤羽根」（赤土）「菱沼」（ヒシ沼）「香川」（カン川——香取がカンドリ、カネトリなると同じ）「甘沼」（カン沼）等が、最も原始的な農耕地形を示す。「高田」「室田」の隣接と並んで古代の海岸線に横たはつてゐる。その上流の隣村はまた「寒川」（サブ川）で、「大藏」（クラは鑛床——金掘り、踏鞴師、鍛冶屋、鑄物師などのオホクラに對して木地屋、炭焼等のコクラ、

オグラがある）「倉見」があり、有名な一の宮の寒川神社（寒川彦・寒川姫なる由緒不明の神を祀る）がある。また、その上流の隣村も「有間」村で、字「今里」（コン里）がある。そのすぐ上流の海老名村に「赤坂」「今泉」がある。その隣の座間に溯ると、「入谷」（ニブ谷）があり、すぐ隣村（新磯）に「新戸」（ニブ戸）、その對岸（依知村）に「猿ヶ島」（サナガ島）がある。厚木から分れる中津川の沿岸にはまた、妻田村「金田」「三田」村（サブ田——今にサンタと訓む）、高峰村「金山」、愛川村「眞名倉」（サナ倉）等がある。

花水川はもと「金目」川であるが、川口近くの大野村「南原」は本來サナミ原でなかつたかとおもふ。サナミ（鈴）を三波などと書きこれをミナミと讀むやうになつたりするのはありふれた例である。しかもそこから分れて北流するのが「鈴」川で、下流に「金田」村、「金目」村、「眞田」村等が相接し、伊勢神人の活動を思はせる伊勢原を通つて雨降山（大山）の麓に達してゐる。さういふことから考へても、きはめて重要な川らしい。雨降山の大山寺は、百濟系の江州人で金屋一黨に屬する木地屋らし

い漆部氏を父とした金鷲童子すなはち後の良辨の採鑛傳説と結びつき、また山内の明王權現は紀州の木工匠で「飛彈大原郡に金縁をうけ」（明王太郎來由）てその姓を得たといふ金丸太郎の因縁を語つてゐるが、雨降の名にうかがはれるやうに、もともとこの山は地方きつての威望ある山神で、或ひはサガミはこれに由來した名でなからうかとおもはれる。新潟縣岩船郡の一部などでは狩人^{マタギ}たちが山神をサガミ様と稱してゐる例もあるからである。鈴川から分れて愛甲郡に溯る支流の源には、玉川村「小野」（小野氏は聖職）、「南毛利」村があるが、後者は或ひはサナミモリ（東京の鈴ヶ森と同じやうな）であつたかもしれない。

また、「丸子」川（酒匂川）は採鑛丸子部にその名を因み、沿岸に小田原市「今井」「穴部」「入生田」「新屋」、櫻井村「曾比」、金田「村」、同村「金手」「金子」、共和村「鍛冶屋敷」等があり、その支流の上に南足柄村「狩野」（カン野、カル野）「猿山」（サナ山）「刈野」（カリ野）等がある。

「鴨ノ宮」（下府中村）、「旭」村等の地名の存するのを併せ考へれば、かうして、熊

野、伊勢、加茂等の諸神人の外に、八幡祭祀者、旭長者、江州金屋、高麗人、秦人等がいづれも砂鐵を重要目的の一つとして相繼いで以上の三流域に入り込み、それらが相寄つて謂はゆる相州鍛冶を形成し、足柄の嶮に護られるこの豊富な鐵を背景として鎌倉幕府の出現した次第がおのづから判明するであらう。傳承に於いて鐵との所縁を多分に負はせられる日本建尊がここで戦ひたまふたことの裏面にも、たしかに鐵が介在したと考へられる。

本書の出版は、道統社長岩壁保氏ならびに伊福部隆彦氏の好意にもとづくものである。識して謝辭に代へる。

昭和十七年四月十一日

於東京市外狛江村泉龍寺前寓居

穴 戸 儀 一

昭和十七年七月十日印刷
昭和十七年八月廿日發行

出文協承認番號(ア60310號)



定價 金參圓

發行部數 二〇〇〇部

民族形成と鐵の文明

著者 東京府北多摩郡狛江村
宍戸儀一

發行者 東京市麴町區有樂町一ノ一四
岩壁保

印刷者 東京市日本橋區濱町二ノ三七
久木印刷所
久木耕一

發行所 東京市麴町區有樂町一ノ一四
株式會社 道統社
電話銀座五四一一番
振替東京一六五五六一番

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

(會員番號 一二〇五七〇番)

946
258

終